埼玉 • 教会 • 壮年

NO. 11号 2012年2月発行

「ノアの箱船、バベルの塔、そして原発」

「第2の敗戦体験」「教会が今、変わるとき」

「あなたの信仰が今、問われている」

「人に惜しまず施す豊かさ」「分かち合う喜び」

「十字架と復活共有体験としての復興」

「東日本大震災について地区壮年部は考える」

2011年3月11日午後2時46分、何の前触れもなく突然の大地震、大地が大きく 揺れ動き、一瞬の時をおいて巨大な壁を思わせる大津波が東北の太平洋岸各地に襲来、平 穏に暮らしていた老若男女をかまわず飲み込み、家々や森林、道路を根こそぎ破壊し、消 え去った。そして東京電力福島第一原発では、水素爆発や炉心溶融など一連の放射能漏れ 事故が発生した。死者1万5848人、行方不明者3305人(2012年2月8日現在、 警察庁まとめ)、避難・転居者は34万1411人(政府の復興対策本部まとめ)に上った。

震災後、もう1年近い。廃墟と化した被災地は、まるで旧約聖書の「ノアの箱船」を思わせる。原発という人間のコントロールの効かないモンスターを造った「バベルの塔」だと表現した論調もあった。生まれ育った古里を追われて寒空の下、避難所や仮設住宅で暮らす人々。「私たちが何か悪いことでもした罰ですか」つい、問いたくなる人が多くいても不思議はない。「我欲に対する天罰だ。洗い流してもらういい機会だ」と発した首都の首長がいた。「神は死んだ。いや、神はもともといなかった。神は張りぼてだった」という言葉も誌面に躍った。キリスト者はこの事態をどう受け止めたのか。

地区壮年部は東日本大震災について考えるため、特別講演会などを相次いで開催した。 日本基督教団総会議長で、越谷教会の石橋 秀雄牧師、埼玉地区長の土橋 誠飯能教会 牧師、そして阿久戸 光晴聖学院大学長に語っていただいたキーワードが上記の見出しだ。

「東日本大震災について地区壮年部は考える」

埼玉地区壮年部委員長 松下 充孝(大宮教会員)

「会堂の天井と壁の漆喰が落下した宇都宮教会」

「牧師館から退去した水戸中央教会」

「地割れ、壊滅的被害のアジア学院」

「大震災の苦難の中に、神様の奥深い摂理」

「震災の痛みを地区内教会が共有、団結するときに」



「会堂の被災状況を調査」

会堂の天井と壁の漆喰が落下して危険なために、避難して礼拝を階下で行った。どうすればよいか来て見て欲しい、との連絡を宇都宮教会から受けたのは震災の3日後だった。その後、幾つかの教会で会堂の被災状況を調査し対策を求める要請が、一級建築士事務所を経営する私のところに関東教区事務所を通して連絡があった。水戸中央教会は、震災後2回も礼拝を守ってきたので会堂は心配ないと言っていたが、行ってみると会堂につながる集会室の2階が牧師館であったが、その階下の集会室が倒壊する危険があったためにすぐに牧師館を退去してもらった。

地割れを起こし壊滅的な被害を受けたアジア学院では、鉄骨の柱の下にある厚いベースプレートがむくれ上がっていた。余震によって危険なために落下しそうな壁や天井をすべて取り除いていた。

多くの教会では牧師先生や役員が、簡易

診断の状況と対策の説明を熱心にメモして 教会員に説明された。また、幾つかの教会 では、礼拝後の全員懇談会や臨時総会に呼 ばれて、状況説明をして補修方法の説明を 行ってきた。

「会堂再建の決議された教会も」

その中で、「会堂の再建の決議」も為された教会もある。簡易診断の要請は、茨城・栃木・群馬・埼玉県の関東地区内だけではなく、福島県のいわき市にまで及んだ。

「震災の意味するところは何か」

このように広範囲の教会を飛び回る中で、この震災の意味するところは何かを知ろうと考えてきた。また、このことを埼玉地区の壮年部をはじめ、地区内教会が共有し、教団・教区・地区が団結して立ち上がるときではないかと、地区壮年部役員会は考えた。

そこで、6月の地区壮年部講演会におい

ては、地区長の土橋 誠飯能教会牧師の開会礼拝に引き続いて、教団総会議長の石橋 秀雄越谷教会牧師の「戦後最大の危機の中で」との講演を伺った。また、11月には、聖学院大学学長阿久戸光晴先生をお招きして、開会礼拝を「主イエス・キリストの貧しさによって」と題しての説教、引き続いて「福島第一原発事故・脱原発をどのように受け止めるか」との講演を伺った。

私自身も両講演会の準備をする中で、また、被災教会を回る中で、この東日本大震災での巨大地震・大津波・福島第一原発事故を通して、聖書から示された。そして、レントの期間に起きた「地震による神様のご計画は何なのか」を考え、それを祈り求めてきた。

「新たな希望と使命」

主の十字架の死によって、あの弟子たちは希望を失い、もとの生活に戻ってしまいました。しかし、人の思いを超えた神様のご計画は、主の墓の前に立つ失望したマリヤたちに大きな地震を起こし、死者との間を閉ざしていた大きな石を取り除かれ、神様との関係を回復してくださり、新たな希望と使命が示されて、復活の勝利の喜びと神様の救いが示された。

ゼカリヤ書1章14から17節では「わたしはエルサレムとシオンに、激しい情熱を傾け、安穏にしている諸国の民に対して激しく怒る。わたしはわずかに怒っただけだが、彼らはそれに乗じて災いをもたらした。…わたしは憐れみをもってエルサレムに帰り、わが家をそこに建て直させると、万軍の主はこう言われる。…わたしの町々は再び恵みで溢れ、主はシオンを再び慰め、

エルサレムを再び選ばれる。」

「わたしに立ち帰れ」

同1章3節にはこうも記されている。「わたしに立ち帰れ、と万軍の主は言われる。 そうすれば、わたしもあなたたちのもとに立ち帰る、と万軍の主は言われる」

「わたしに立ち帰れ」と呼び掛ける神の 御言葉に私たちも従おう。「そうすればわた しもあなたたちのもとに立ち帰る」と約束 されているではないか。そして東日本大震 災の被災地に住むキリスト者をはじめ、被 災地に心の目を向けている人々の住む町が 再び恵みであふれ、主は再びシオンと同じ ように慰めの聖霊で満たし、エルサレムが 再び選ばれるように、私たちをも選びの輪 の中に入れて下さることを信じたい。

「忍耐と練達の先にある希望」

今、私たちは主イエス・キリストの十字 架と復活によって、救いの恵みの豊かさの 中におかれている。この大震災を通して苦 しむ者と共に苦しみ、悲しむ者と共に悲し む。苦難の中を忍耐し、練達の先にある希 望が与えられ、キリストによる平和が実現 されて、神様の約束がより確かなものとな るように。神様は激しい情熱を傾けて私た ちを憐れみ、恵みと慰めを与えようとおら れる方だ。

この大震災の苦難の中に、神様の奥深い 摂理があり、神様の御心が働いていること を信じる。(松下設計 代表取締役) 関東教区埼玉地区壮年部

2011年6月26日(日)埼玉新生教会

「東日本大震災・特別講演会」



開会礼拝「極度の貧しさからあふれ出る思いやり」 「分かち合う喜び」「人に惜しまず施す豊かさ」

「想像力と共感力にプラス信仰力」

埼玉地区委員長・土橋 誠 飯能教会牧師

3月末から4月にかけて東日本大震災の 被災者のために中古衣料を捧げてほしいと お願いしたところ、各教会、伝道所でたく さんの衣類を短い期間に大宮教会の集会室 が使えないほど集めて下さり心から感謝申 し上げる。婦人部の皆さんには5月の婦人 部の総会の時にお礼申し上げたが、壮年部 の皆さんにはあらためてお礼を申し上げる。

「各個教会の協力に感謝」

ご承知のように4月に大船渡教会(岩手県大船渡市)でミニバザーを行った。2トントラックいっぱいの衣料を持って行き、被災者の皆様に受け取っていただいた。餅つき、焼きそば、焼き肉などの提供も大宮教会や各教会の皆さんの協力で行った。5月末から6月にかけて地区委員会と地区の災害対応委員会のメンバーとで、宮城県石巻市の4カ所でのミニバザーを開くことができた。大船渡教会でのミニバザーも、石巻市のミニバザーも被災者の方々にとても喜ばれたことを、ここで報告したい。

こうした活動を埼玉地区として行うこと ができたのは教会、伝道所の皆さんの力に よるものだ。たくさん集まったからこそ良 い品物を被災地に持っていくことができた。

「珠玉の一滴」

集めて下さった皆さんの心の思いの「珠 玉の一滴」を持っていくことができた。た くさんの衣類が集まったことについて思っ たことは、教会・伝道所が心を一つにして やろうと思ったならそれが御心にかなった ものであれば私たちの思いをはるかに超え て実現される。そうしたことが起きるとい うことを心に深く思わされた。中古衣料の ヤマには主の恵みの豊かさがあふれていた。

「激しい試練に満ち満ちた喜び」

コリント第二の信徒への手紙、これを書いたパウロはマケドニア州の教会から、豊かな思いをたくさんもらっていたのではないか。特に8章2節、「彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、そです」というパウロの言葉は、マケドニアの教会の人たちの信仰とその思いの深さにパウロがどんなに喜んでいたかということを感じさせられる。マケドニア州は東ヨーロッパのバルカン半島、中央部にある。この地域は当時、ローマによって支配され、農地は豊かであったとされているが、紀元

前2世紀の文書によると、この地の金山や 銀山はローマ人に支配され、銅と鉄の精錬 の権利や塩の輸入、木材の伐採の権利もロ ーマ人に奪われていたといわれている。

パウロの時代はそれから200年ほどたった時代で、同じ状態が続いていたかどうかは定かではないが、それでもこの地域一帯がローマの支配下であった。貧しい農民、手工業者、小商人といわれる小さな商いをやる人々の生活は苦しかったと、想像される。そうした厳しい生活状態の中で、洗礼を受けたキリスト者の生活はなお一層厳しかったと考えられる。

「キリスト教は今でいう新興宗教」

当時、キリスト教は今でいう新興宗教である。主が十字架に架けられてから20年、30年、キリスト教はその時期まさに新興宗教であった。マケドニアの地域というのはギリシャの神を信じる人々が多数いる地域、ギリシャ哲学というような考え方を持つ人もたくさんいた。当然のこととしてそうした人々とそこで葛藤が生じた。使徒言行録16章をみると、パウロとシラスは牢獄に入れられたとあり、それを物語っているといえる。

「地域社会で異端視」

新興宗教を信じるものとして地域社会で 異端視され、生活の場、あるいは生活の共 同体も兼ねていたユダヤ教の会堂から追い 出されていく。そうしたことは地域社会の 生活権を奪われるということにつながって いった。当時のマケドニアのキリスト者た ちが一般の人々の中にあってさらに貧しい 状態にあったというのは、おそらく間違い ない。「苦しみによる激しい試練を受けていた」という言葉にそのことが示されている。

また、極度の貧しさというこの言葉には、 その貧しさが一般的なものではなく、きょ うのパンのかけらにも欠けるほど厳しいも のであったことを示している。そうである にもかかわらず、自分たちのためにではな く、「人に惜しまず施す」という「豊かさ」 が与えられたとある。それが何と尊いこと かと思わされる。

マケドニアの教会の人々はパウロからあるいは他の信者たちからエルサレムの教会の状態について聞いたのかもしれない。手紙によってか、伝聞によってかは分からないが、現代のようにテレビ映像によって次々にその被災の状況が伝えられるという、時代ではなかったから、情報量としては少なかっただろう。その少ない情報であったにもかかわらず、極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず、施す豊かさとなったといわれるまでに捧げることをしたのだ。

「貧しさを心に深く思う想像力」

おそらくここにはエルサレム教会の信徒たちの貧しさを心に深く思う想像力が豊かにあったからだと言える。そしてその想像力の豊かさが、現代のテレビ映像よりもはるかにエルサレム教会の信徒たちの貧しさの現実をしっかりと受けとめ、自分たちが極度の貧しさの中にあるということによって強い共感を持ったに違いない。

想像する力と共感する力、これがマケド ニアの教会の信徒たちの心を突き動かし、 エルサレムの教会の貧しい信徒たちのため に捧げるという、行動を促した。

この想像力と共感する力が、現代人であ

る私たちにも同じようにあることを示した のが、あの大宮教会にたくさん集められた 中古衣料のヤマであったと思わされる。た だ、問題はこれから。この後も想像力と共 感力を持続できるかどうかだ。

「あなたがたの益になる」

パウロはコリントの信徒たちにこのよう に言っている。同10節一。「この件につい てわたしの意見を述べておきます。それが あなたがたの益になるからです。あなた方 は、このことを去年から他に先がけて実行 したばかりでなく、実行したいと願っても いました」。このパウロの言葉から分かるこ とはコリント教会の信徒たちもマケドニア の教会の信徒たちと同じように、エルサレ ム教会の貧しい信徒たちについて話を聞き、 共感し、その結果、自分たちも助けようと 計画し、捧げものをしようと決意し、始め ようとしたことが分かる。しかし、それが 1年後になっても計画通り、実行できなか ったばかりか、それを止めてしまった。そ ういう状況がコリントの教会にあったこと がパウロの言葉から分かる。

「コリントの信徒たちの挫折」

どうしてコリントの教会の信徒たちはそれを途中でやめ、挫折してしまったのか。 コリントの教会の信徒たちもマケドニアの 教会の信徒たちと同じように温かい心を持っていたはず。心を突き動かされて「こうしよう」と、決心した。にもかかわらず、彼らはこの第2コリントに書いてあるような言葉でもう一度促されなければならなかったのか。

そのことを考えるとき、ここにはマケド

ニアの教会の信徒たちとコリントの教会の信徒たちの間に、何か違うところがあったと言わざるを得ない。その違いが何であったのか。それはコリントの教会の信徒たちの想像力と共感する力がなかったわけではない。あった。ただ、それが人間的な思いであったのではないかと、考えられる。

13節に「他の人々には楽をさせて、あなたがたに苦労をかけるということではなく…」というパウロの皮肉のような言葉が記されている。コリントの教会の信徒たちを助けたいという純粋な思いで動き始めたが、しばらくしてそのような行動はエルサレムの教会の信徒たちが楽になるだけで、自分たちには何の益もないのではないか。そういった不満というか、そうした思いが生まれてきたことをこの言葉は物語っている。

ここには想像力と共感する力があっても 持続することのできなかった原因が示され ている。人間的な思いが勝っていたと言わ ざるを得ない。

「人間的な想像力と共感には限界」

人間的な想像力と共感する力だけでは限界がある。「信仰力」とでもいうような信仰で与えられる力が伴っていなかったら、極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず、施す豊かさとなったというような行動を継続的に行うということは困難だ。多くの場合、コリントの教会の信徒たちが持ったような不満な思いが湧き上がってくる。「ぶつぶつぶつぶつ…」という声が聞こえてくる。

「主に捧げる目的意識と使命」

パウロはマケドニアの教会の信徒たちに

ついて5節で、「また、わたしたちの期待以上に、彼らはまず主に、次いで、神の御心にそってわたしたちにも自分自身を捧げたので…」と語っている。この言葉にはマケドニアの教会の信徒たちがエルサレムの教会の信徒たちのために捧げるということとがるというになっていた目的意識、使命を持っていたことが語られている。この目的意識、使命があるために指したのです。というような行動を起こすことができ、それが継続的な力を持ったと、そう考えることができる。

「神の創造の御業による命への関心」

今私たちは、東日本大震災の被災者、福 島原発の放射能汚染によって避難せざるを 得ない人々をテレビの映像や新聞によって 伝えられている。

ここにはエルサレム教会とマケドニアの教会の信徒たちというような信仰的関係は、被災地の教会は別として、一般の人たちと私たちの間にはない。しかし、そうであるにもかかわらず私たちが関心を寄せ、捧げることをしたいと思うのは、昨日も「部落解放キャラバン2011」の礼拝の時に、石橋秀雄先生がおっしゃっていたが、被災された方々、私どもも、その命が神の創造の御業によっている、そうしたことがある。だからこそ、私たちは被災された人々に関心を持ち、「何かできることがあればしたい」と、思う。

そこに視点を置いて考えてみるとき、神

の創造の御業によって命を与えられた人々が、痛み苦しんでいるという現実を目の当たりにして私たちの思いや心は広げられざるを得ない。信仰者であるか、そうでないかという問題ではなく、共に神の被造物であるということにおいて為すべきこと、できることをしていかねばならないという思いを与えられる。

「信仰力という、力、」

私たちはそうした業を人間的な共感する 力であるとか、人間的な想像力に加えて、 信仰によって与えられる「力」とでも言え る「信仰力」によって被災者の問題、地震 の問題、原発の問題といったものを考えて いくことにしたい。そうしたならばまさに、 その人、その教会・伝道所の力に応じ、ま た力以上に自分から進んで行うことのでき る業が何であるか、ということに心するこ

とが御霊によって与えられるのではないでしょうか。





土橋 誠(どばし・まこと)

明治学院大で社会福祉を専攻。東京都 江東区、静岡県御殿場市、東京都あきる野 市などで保育園長を歴任。園長をやりなが ら日本聖書神学校に学ぶ。卒業後は世田谷 区の祖師谷伝道所、茨城県日立市の日立教 会で牧会。現在飯能教会牧師。山梨県出身。 64歳。

埼玉地区壮年部講演会

2011年6月26日(日)埼玉新生教会

「東日本大震災と東京電力福島第一原発放射能漏れ事故で今」

「戦後最大の危機の中で」―教団・教会・私たちは―



「それでもあなたは今、神を信じますか」 「あなたの信仰が今、問われている」

「70周年の教団、教会が今、変わるとき」

日本基督教団総会議長 石橋 秀雄・越谷教会牧師

埼玉地区壮年部からの講演依頼を台湾長 老キリスト教会から招かれ、出席していた 総会の最中に現地のホテルへの電話連絡で 受けた。台湾長老キリスト教会は、東日本 大震災時にはすぐにお見舞いに来てくれ、 1千万円を献金。さらに3,500万円を 追加献金、合わせた額は4,500万円。 総会に出席してお礼を申し上げた。

「11246祈りの会の呼びかけ」

「被災地に、被災地の教会に、共に熱い祈りを」―全キリスト教会の11246祈りの会の呼びかけ―という言葉を、地区壮年部講演会のビラに掲載していただき感謝。

東日本大震災が発生した3月11日午後2時46分を示す「11246」というこの祈りの時を大事にしていきたいと思っている。実は6月11日の土曜日、11246のこの時間に東京教区の東京信徒会では講演会を開いた。被災した午後2時46分に講演を中断して、祈りの時を持ってくれた。「その日、その時を覚えて祈ります」との話に、それを聞いてうれしかった。

「教団が変わる出発点に」

教団は今年で70周年。先週の6月24 日に創立70周年の記念礼拝をした。私が 説教をした。70周年というこのときに、 3月11日午後2時46分、この時が歴史 の中で覚え続けられていかなければならな いし、このときによって、このときから「教 団は変わった」といえる時にしなければな らない。それは戦後最大の危機、その危機 を覚えることも大事だが、この危機の中で 「教団が何をしたか」、「そのことを通して 日本基督教団の教会がどう変わったか、ぜ ひ変えていきたいと思っている。この思い が皆さんに伝えられていることはうれしい ことだ。これは教団のみならず、「1124 6の祈りの時」を教派を超えて日本の教会 に呼び掛けたいと思っている。「共に祈りま しょう」「とにかく祈りましょう」、「祈りに 熱くなりましょう」と、訴えていきたい。 そのことが、戦後最大の日本の危機の中に ある方々のために力となり、慰めとなるこ とであると共に、教団がそのために変わっ ていかなければならない。日本の教会は変

わっていかなければならない。そのために 祈り合う。そのことを強く考えている。

「その時間、東神大卒業式で祝辞」

11246、この時間、私が何をしていたか。東京神学大学の卒業式が行われていた。私は教団の代表として祝辞を述べるために講壇に座っていた。その時にあの地震を経験した。ものすごい揺れでしたね。近藤学長の説教が6分間中断した。

それから私の対策のための働きが始まる。 礼拝が終わって愛餐会が始まり、大阪教区 の市川忠彦先生が「仙台ですごい地震があ ったらしい。大変な被害が出たようだ。こ こにいていいのか」と言われた。

そんなすごい、大変なことが起こったのか。情報はないし、すぐ東神大を出て、教団の事務局に向かった。武蔵境の駅のシャッターはは閉まっていた。ショックだった。情報は全く入らない。バスのターミナルは人で動かない。何が起こったのだろうかと思った。いる明いているはずのJRのシャッターが閉まっている。警察官に「西早稲田まで行くにはどうしたらいいか」と聞いた。すると「井の頭通りを歩いて行ってい」と以外にありません」。それで、井の頭通りをとことことに歩いて行った。

「都心から人、人、人の波」

寒い日だった。すごい寒い日。身体が冷 えてきた。冷えたらジョギングして身体暖 めて、そして歩いてまたジョギングして…。 そしたら、都心から人、人ですよ。人の波。 「東京もすごい被害に遭っているのか」「何が起こったんだ」。携帯も通じない。情報もない。そこから押し出されるようにして4時間半かけて教団の事務局に行った。歩いて走って、歩いて走って。よく心臓麻痺で倒れなかったかと思った。教団総幹事と2人の3人がいた。帰れなくて教団事務局に居ざるを得なかった。彼らが情報収集をしてくれていた。私はテレビで初めて、「こんなすさまじいことが日本の社会で起こっているのか」と、もうびっくりした。

「被災地の教会に片っ端から電話」

一晩教団事務局に泊まって翌朝5時56 分から被災地の教会に片っ端から電話をかけまくった。しかし、通信網が切断されているので通じない。あのすごい津波の被害を受けながら、あの地域にも教会がある。附属幼稚園がある。情報が全くこない。不安な思いになった。教団の規則に従って被災対策委員会を設置することになっている。

「幹事、社会委員らと4人で現地に」

総幹事が駆けつけたところで12時半ごろから社会委員長を含めて直ちに対策委員会を設置、それから教団の活動が始まった。

席上、私は明日行きたい。もう日曜日だけど明日行きたいと提案した。東日本大震災2日後の13日、幹事2人と社会委員の4人で現地に行くことになった。越谷教会の礼拝をすっぽかして行ってしまった。しかし、不安で仕方なかった。どうなっているのだろう。越谷教会の礼拝は緊急時ということで伝道師にお願いした。役員会の了承も取り付けた。

「関越道経由で夜中、仙台に」

午前6時45分、東北道は通じないので 関越道を通って新潟県の十日町教会で礼拝 を守った。中越地震の時、中心的な働きを した教会だった。それから山形回りで夜中 の12時に仙台に着いた。十日町でいろい ろな物資を買い込んで、ガソリンも積み込 んで出掛けた。東北教区議長が待っててく れて、現地をみてそれから対策を立てるこ とになる。

「5年間で10億集めたい」

日本基督教団が今まで何をしたか、これ から何をするか。今は社会委員会が献金を していただいている。これからは対策本部 が本格的な形で支援活動し、対策を立て活 動をしていく。今、社会委員会の献金をお 願いしているが、これからは対策本部から の献金のお願いになる。それだけの資金が 必要になる。東日本大震災募金ということ で、国内募金10億円、5年の間に何とか 10億集めたい。やらなければならない。 阪神大震災における募金が大体 5 億円だっ た。規模から言っても10億円はぜひ国内 で集めたい。30の教会が被害を受けてい るから、その30の教会の会堂の再建、あ と5億について言えば、地域の教会が行う 地域活動の支援、特に弱者、子供たち、高 齢者、さらにハンディを持った方々、行政 の光が届かない方々への支援をしていきた い。教会の支援をしていただきたい。先ほ ど配布した教団の資料にはそこに基本方針 が記されている。

「伝道に熱くなる教会の取り組み」

主題としては、地域の人々の救いに仕え

る教会の再建を目指して、即ち被災地の教会ではなくて、被災地の教会が元気になるということは日本基督教団全体の教会が元気になる。そういう取り組みをしたい。被災地ではない。私たちの教会だ。日本基督教団は今、伝道に熱くなる。伝道に熱くなる教団、伝道に熱くなる教会を訴えていく。そのように教団は変わっていかなければならない。従って、今回の地震、津波、福島原発、これは人災だ。そういう痛みの中にある、大変な日本の戦後最大の危機の中にあって、これに取り組んでいく。

「日本基督教団全体の再建」

特に被災教会の再建を通して、日本基督 教団全体が再建されていく。そのような活 動をしていきたい。していかねばならない。 ということで基本方針と活動の具体的なこ とがここに記されている。

「海外献金の目標は12億円」

また、海外のプロジェクト、海外から協力したい、献金をしたいという要請があり、これは12億円としている。12億集めるのは大変だが何とか頑張りたい。海外献金のプロジェクトも組んで活動していきたい。

国内募金が7、440万円とあるが今、 国内は8、600万円。日本基督教団社会 委員会への募金。海外からは8千万円から 9千万円集まっている。これが今、教団に 寄せられた献金だ。まだまだこれから献金 活動をしっかりしていかなければならない。

「神様のなさることはすさまじい」

具体的な私の体験を通した思いを話させていただく。大船渡教会に越谷教会の信徒

がいる。15年ほど前に引っ越してきて転会しない。礼拝出席13人くらいの教会だから転会すればいいのにと思っていた。何度か電話をかけてくるが、震災後最初に私にかけてきた電話は「神様のなさることはすさまじい」という言葉だった。おびえながら。大船渡教会はがけの上にあり津波の被害は受けなかった。がけの下、市役所などがある市街地の中心部は全部すさまじい破壊の中にある。私が行ったとき、市役所のそばは瓦礫の山になっていた。市役所もかなり破壊されていて、アメリカのレスキュウ隊が潜って捜索してくれている。そこに出くわした。「信徒の友」にこの写真が載っていた。これは私が撮った写真だ。

大船渡教会にいるうちの教会員が「神様のなさることはすさまじい」と言った。すべては神の主権の元にある。「それでもあなたは神を信じますか」。そういう問いが今回の大震災、そのことを通して信仰者に問われている。そう思う。

「助けは 天地を造られた主に」

基本方針の下に聖句が書いてある。あの大地震を見て、あの津波を見て、あのすさまじさを見て、「まずこの御言葉によって教団は歩んでいこう」と私は思った。それが詩篇124編1節~8節の御言葉だ。日本基督教団はこの大震災、大災害に当たって、津波の大破壊の中にあって、この御言葉で働いていきたい。この御言葉に励まされて。この詩篇124編の全8節を掲げている。こう記されている。「イスラエルよ、言え。『主がわたしたちの味方でなかったならわたしたちの味方でなかったならわたしたちの味方でなかったならわたしたちの味方でなかったなら

き、わたしたちは生きながら 敵意の炎に 呑み込まれていたであろう。そのとき、大 水がわたしたちを押し流し 激流がわたし たちを越えて行ったであろう。そのとき、 わたしたちを越えて行ったであろう 驕り 高ぶる大水が。』主をたたえよ。主はわたし たちを敵の餌食になさらなかった。仕掛けられて網から逃れる鳥のように わたした ちの魂は逃れ出た。網は破られ、わたした ちは逃れ出た。わたしたちの助けは 天地 を造られた主の御名にある」

「確信を揺り動かす出来事」

宗教改革者カルヴァンは、自らつくった 礼拝式分の一番最初にこの御言葉を掲げて いる。「わたしたちの助けは 天地を造られ た主の御名にある」この御言葉が唱えられ て礼拝が始まる。すべての生活の始まりに この御言葉が示されていることが、大きな 力だ。しかし一方、この確信を揺り動かす 出来事が起こる。「主がわたしたちの味方で なかったなら、…大水がわたしたちを押し 流し 激流がわたしたちを越えて行ったで あろう! 一主がわたしたちの味方であった が故に、その危機から助けられた」と書い てある。今回はそうじゃない。その大水に 呑み込まれてしまった。驕り高ぶる大水に もう、押し流されてしまったのだ。「それで もあなたは神を信じますか」という問いだ。 この詩篇の言葉は今の日本の現実の中に、 私たちの信仰が問われてくる。「それでも信 じますか」。

「全土消滅、昭和消滅、神様消滅…」

アエラの4月11日号、文筆家、写真家 の藤原新也が津波の惨状を写真に撮り掲載。 そこに記された言葉は「全土消滅、昭和消滅、神様消滅、独立独歩」となっている。

「神様消滅」とある。「これが神様の業だったら、こんな残酷な神様は信じません」「神様のなさることはすさまじい」。だったら、そういう神様は信じることができません。命ある環境をずたずたに引き裂いた、そんなことをする神様は信じられない。「それでもあなたは神を信じますか」。私たちの信仰が問われている。

「神幻想を失った私たちは孤独」

彼はこんな風に書いている。「私は水攻め、 火攻めの地獄の中で、完膚(かんぷ)なき までに残酷な方法で殺され、破壊し尽くさ れた三陸の延々たる屍(かばね)の上に立 ち、人間の歴史の中で築かれた神の存在を 今、疑う。それはイワシの頭を信じる愚か な者が叫んだように、罰が当たったのでは なく、神はただの張りぼてであり、もとも とそこには神という存在、そのものがなか っただけなのだ。そして神幻想を失った私 たちは孤独だ。しかしまた孤独ほど強いも のはない。悲しみや苦しみ、痛みを乗り越 え、神幻想から自立し、自ら二本の足で立 とうとする者ほど強いものはない。神様を ただの張りぼてであり、もともとそこに神 という存在、そのものがなかっただけの話 だと言うわけだ。このことが私たち信仰者、 日本の教会に突きつけられている。今回の 出来事を通して。どのように答えることが できるのか。

「苦難の底で神と深く出合う」

この詩篇124編の信仰者の信仰の歴史、 イスラエルの信仰の歴史に新しい目を向け る。主はどこで出合って下さったのか、「神なんかいない。それでもあなたは神を信じますか」。外国の強大な軍事力によってめちゃめちゃに破壊されて、おびただしい数の犠牲者が、悲しい姿をあらわにさらしている。そういう破壊が起こった。その中で「あなたはなお神を信じますか」という問いを旧約聖書の信仰者たちは問われ続けてきた。しかし、その苦難の底において神と深く出合うという出合いを経験しながら、「それでも私は神を信じます」、「主の助けは天地を造られた主の御名にある」と断固として告白する信仰者へと育てられていった。

「イエスの死を見つめる」

この旧約聖書の歴史に目を向けながら、 そしてイエス様に目を向ける。「それでもあ なたは主を信じますか」。私はずーと何を見 ていたかというと、イエス様の死を見つめ てきた。「エロイエロイ、レマ、サバクタニ」 (我が神、我が神、どうして私をお見捨て になるのですか)」と叫んで息を引き取られ たイエス様の死を見つめてきた。すさまじ い破壊、藤原 新也さんが、「神様消滅とい う地獄との戦いに立って、私はイエスの死 を見つめてきた。本当に見つめてきた。3 月11日、地震が発生して教団に泊まり込 んで13日には仙台に向かい、14日、月 曜日、パンを一切れ食べて出掛けた。被災 地の教会、あのすさまじい津波を受けたと ころに出掛けてきた。それを見ながらイエ スの死を見つめてきた。すさまじい破壊だ った。もう、特に石巻に入ったとき、皆さ んテレビで見たようなあの姿。もう、街の 中には入れない。街の中は車が走っている が、それは街の中にいる方々で、外には出

られない。外から来た車は中には入れない。 もう、道順はヘドロだ。折り重なっている、 車が。このポスターに描く通りだ。

「言葉を失って歩く私の姿」

教団新報に私たちの写真を載せてもらったが、この写真は、私が歩いている。すさまじい現場を言葉なく、言葉を失って歩いている私の姿だ。朝、一切れのパンを食べて、おなかが空かない。食べる気がしない。水も飲む気がしない。それほどの現実だ。夜11時半に帰るまで一切の食べ物を口にしなかった。水は飲んだ。食べる気がしない。それほどの惨状だ。石巻栄光教会、石巻栄光幼稚園、まずそこに行った。それから石巻山城町教会、その2つの教会を訪ねて水だとか果物、缶詰を渡した。

「九死に一生を得た青年の話」

石巻栄光教会の幼稚園は危難所になっていた。ここまでは津波が来るはずがないのに来てしまった。もう、園庭はヘドロ。礼拝堂にも入ってきた。そういう教会に水や食べ物を差し上げて帰ろうとしたら、一人の青年、この青年を車に乗せていってほしいと依頼された。この青年に車の中で話を聞いた。この青年は九死に一生を得た。津波のただ中で助かったのは千人に一人といわれた。まさに千人に一人の人だった。女川の原発に資材を納める会社のセールスマンだった。女川原発に資材を納めて帰る途中に津波にあったという。

「こんな所で死ぬものか」

車で走って帰る途中で津波のサイレンを 聞き車を捨てて外に出た。塀に上った。襲 ってくる。この塀では間に合わない。塀の 上に屋根があり、そのてっぺんに上って「こ んな所で死ぬものか」と必死になって、そ こで一晩明かした。もう、目の前で家が流 されていく。目の前で。あの日は寒かった。 雪が降っていた。凍っていた。後から聞い た話だが、屋根から滑り落ちるのではない かと、必死になって屋根にしがみついてい た。乾いているのはネクタイだけ。後はび しょびしょ。ネクタイを首に巻いて一晩寒 さを耐えた。夜が明けた時に「助けてくれ」 と叫んだら、気付いてくれて船で助けてく れた。みんなで助けてくれた。屋根から下 ろされて歩きながら犠牲者の遺体を運ぶ手 伝いをしながら避難所で服をもらって、食 べ物をもらって6時間かけて石巻までやっ てきた。そこで一人の若いご婦人が重い荷 物で困っている姿を見て「荷物を持ってあ げましょう」と言って助けてあげる。それ を持っていった家が石巻栄光教会の役員の 家だった。その女性が赤ちゃんを産んだば かりで外に出掛けて帰ってくる途中にその 青年に助けられた。すごい喜んで「休んで いきなさい」と言った。疲れ果てているか ら。その家で休ませてもらって、水も出な い、ガスも出ない、電気も点かない状態で 温かいみそ汁、ご飯を食べさせてもらった。

「うわー、こんなにメールが…」

その青年を仙台まで連れて行ってほしいということだった。車に乗せた。すると携帯を充電させてほしいと言った。すべて通信網は遮断されている。すると携帯が反応した。「うわー、こんなにメールがたくさん来ている」と言ったところで電話がかかってきた。女子職員の声だった。金、土、日、

月の4日間、津波が起きた方面に仕事に行っが、消息が分からない。電話しても、メールしても全く反応がない。

「みんなに助けられて生きている」

もう、心配で心配で仕方がない。その女 子職員の声が前の座席にも聞こえてきた。 「何やってんのよう」。どれほど会社の人た ちが心配していたことか。彼は涙を流しな がら「みんなに助けられて生きているんだ よう」と言ったこの言葉が、非常に心に響 いてきた。「あの津波が怖かった」、「こんな 所で死んでたまるか」という「頑張ったぞ」 という思いでもない。「みんなに助けられて 生きているんだよう」と言ったこの言葉、 彼の名前は知らないが、彼の人生のこれか らにどれほどの大きな影響を与える経験に なったことか。彼はたぶん、これから「あ れがあったからこれからの自分の人生があ ったんだ」といえるような人との出会いを 彼は経験した。あのすさまじい津波のただ 中に何を見るか。「主イエスの死をそこに見 続ける」。

「被災者の話し相手に」

3月28日からは東京神学大学学生11 人と越谷教会の青年など13人の青年をマイクロバスに乗せて、今度は奥羽教区の議長の了承を得てボランティアに出掛けた。 釜石に行った。新生釜石教会の牧師の指導を受けながらボランティアをした。たぶん、まとまった形でボランティアが行ったのは我々が最初ではなかったか。東京神学大学の学生がまとまった形で最初にボランティアに行ったと思う。本当にめちゃめちゃな洋服屋さんの後かたづけをした。よく頑張 ってくれてきれいに片づけた。また、そこの牧師が「避難所に行けない人たちがいる」、「もう、愛する者を失ってそこを離れられない人がいる」。あの人たちは食べ物も飲み物もなく困っている」一そういう人たちの話し相手になったり、そこを片づけたりする手伝いをしなさい、それなりに神学生たちは大きな出合いを経験してきた。

「釜石、大槌町、宮古で祈って…」

最終日は花巻を出て、祈って、祈って、 祈って回ってきた。釜石で祈り、大槌町で 祈り、山田町で祈り、宮古で祈った。涙が 出てきた。その祈りを重ねる中で何か「迫 り」を感じた。あの破壊された現地に立っ てそこで聞いた言葉は、思い続けた言葉は 「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」。十 字架に死んだイエスを見続けた。主イエス を見続けてきた。何かの迫りを感じながら。 ある日、聖学院の大木 英夫先生から呼 ばれた。わたしは聖学院の中学。高校の出 身。5月18日に聖学院の大学院の院長室

「神の迫り」

に招かれた。

大木先生は「今回の東日本大震災について神の迫りとして受け止めなさい」とおっしゃった。「神の迫りとして受け止めなさい」一「ああ、そうか」と思った。何か迫られている、確かに迫られている。何に迫られているのだろう、と思ったときに、大木先生の言葉が私を意識化してくれた。そんなことを思いながら3月11日午後2時46分のことを思う。このとき、東神大のチャペルで揺り動かされた地震。あの地震は日本基督教団が神の迫りを受けて揺り動

かされた、というふうに私は今、受け止めている。「11246」をとても重要な時として提示してきた。日本基督教団が揺り動かされた。神様の迫りを受けた。

「日本の教会が立つとき」

さらに大木先生はおっしゃる。「教会の時なんだ今は」、「この大震災、戦後最大の危機の中にあって教会が立つときだ」、「日本の教会が立つときだ」「日本基督教団はこの時こそ伝道する教会として立たねばならない」とおっしゃった。ものすごいプレッシャーを受けた。私に対して。「あなたのことを見ているよ。見届けるよ」「日本基督教団がどのように再生していくか。それを見届けなければ私は死ねない」と言った。

「今、教会のとき」

「今、教会のときだ」―福音が教会に託されている。まさに今、この福音を指し示すとき。そのときに大木先生は言った。「今、イエスの死を見つめるときだ」。

「神の主権の元に私はある」

私の言いたいことは、とても否定的な受け入れられない出来事を、それは神の業とはとても言いたくない、でも、神の業としてそれを本当に神の主権の元に、自分たちすべてがあるのだということを信じることが許されれば、そこに救いがある。そこにしか救いがない。これが旧約聖書を通して私たちに訴えられてくる事柄だ。今、悲惨な1万5千人の方々が命が断ち切られて、一人の命が断ち切られたということはいろんな命の関係があって、それが全部断ち切られた。今、悲劇の中にある方々に、それ

が神様の業だとはとても言えない。しかし、 言えることは、すべての悲惨のただ中に、 奈落の底にイエス様は沈んで下さった。

「主の御手の中にあるという確信」

その悲劇のただ中にあって、そこで本当 の、真の神様の救いに与ることができる。 そこに私たちの希望がある。そういった面 ではすべてが主の御手のただ中にあるとい う確信を持つことができるならば、それが 私たちの希望なのだ。その確信を持って新 しく歩むことができるかどうか、まさに問 われているのだ。それでもあなたは神を信 じますか。旧約聖書の信仰者たちは「それ でも私は神を信じます」と告白しながら断 固として「我らの助けは、天地を造られた 主の元にある」という信仰の歴史が200 0年間続いている。旧約聖書を含めれば3 000年の歴史がある。その確信の中に私 たちが立つかどうかがいま、私たちに問わ れているのかもしれない。

講師プロフィール

石橋 秀雄(いしばし・ひでお)

1944年旧満州新京特別区に生まれる。 70年東京神学大学大学院修士課程修了。 日本基督教団鴻巣教会牧師、同附属英和幼稚園園長。81年同越谷教会牧師、附属越谷幼稚園園長。関東教区総会議長、教団伝道委員長、同常議員、10年同総会議長。

趣味はテニス、腹話術(ロゴス腹話術研究会腹話術2段師範)、著書「このことを離れては」「主にあって笑う」。教会附属幼稚園教諭を務める由美子夫人との間に3女。67歳、埼玉県出身。

開会礼拝

「人間が受ける故なき苦難は神の業が始まるため」
「愛と自由が結合するとき、力ある神の御業が始まる」
「本当の豊かさはキリストの貧しさに連なっていくこと」
「神よ、私たちをも御用にお用い下さい」という祈りを
聖学院大学長 阿久戸 光晴 先生

この度の東日本大震災においてはいろいろな問いが出された。神も仏もないものか。 イエス様は3月11日、どこにおられたのか。なかでも私たちが大きな衝撃を受けたのはある自治体の長の方の発言だった。

「人類が問い掛けてきた故なき苦難」

この大震災は爛熟した若者文化への罰だ。 鉄槌だという言葉だった。私はすぐにイエ ス・キリストはそのようにおっしゃるだろ うか、と思った。今お読みいただいたとお り、ヨハネによる福音書第9章1節以下に よると、生まれつき目の不自由な方をイエ ス様と弟子たちはご覧になられたときに、 弟子たちは「先生、この人は生まれつき目 が不自由なのは誰が罪を犯したからです か」と聞いた。故なき苦難の意味を、人類 は長く問いかけてきたといっても過言では ない。大別をすると、4つの説明の仕方が ある。「あきらめて受け止める」という考え 方だ。ただひたすら、なすがまま、苦難を じっと受け入れて耐えるしかない。2番目 は全く逆で、憤りと怒りのはけ口を求めて、

なぜこのような故なき苦難が与えられるのか。怒るべき先を探して行く道だ。イエス様の弟子たちにも熱心党といわれる人々は、まさにそのような考え方の人々だった。

「ヨブの苦しみ」

3番目に「罪は何らかの罰ではないか」 という、まさにこの弟子たちの通俗的とも いえる、否、普遍的ともいえる考え方。旧 約聖書のヨブ記にも3人の友人たちがヨブ にそのように言って、ヨブの苦しみを増し たのである。神様は故なき苦難を人に与え るはずはない。「ヨブよ。何らか、どこか反 省をすべきところがあるのではないか。あ なたに落ち度があったのではないか」、「い や、人間は探せば落ち度のない人などない」、 「落ち度を反省することが大事だよ」。実は 苦難を受けていない友人がこのようにヨブ を追い込んでいくということはどれほど大 きな怒りと悲しみをヨブに与えたか、と思 う。しかし、生まれつき目の不自由な方は 生まれつきである。「本人が罪を犯したので すか」、あり得ない設定だ。そこで弟子たち

は「両親ですか。両親に何らかの落ち度があったから、子どもの本人にこの罰としての苦難が出ているのではないか」ということであった。しかし、生まれつきである。

「苦難とは人間にとっての教育?」

現在の日本にも時々現れてくる新興宗教、 新々宗教のいくつかによれば、「前世が悪 い」「前世が悪いからあなたは苦しんでいる のだ」「自分に覚えがないとしても、あなた の前世が悪いに決まっている」と、こうい うことだ。いずれもこれらは合理化、合理 的説明の手段である」といって間違いない。 ちなみに4番目の説明方法は、「苦難とは人 間への教育である」とする考え方だ。ヨブ 記のエリフという4番目に現れてくる年若 い、いささか粗野な言論を使っていく人の 考え方が、「この苦難とは人間にとっての教 育なのだ」という説明だ。苦しむ人本人が 受け止めるならば良いであろう。ヘブライ 人の手紙にも出てくる。箴言にもこのメッ セージに類似した言葉が出てくる。コヘレ トにもそのようなメッセージが出てくる。 苦しむ本人が神様を讃美し、感謝として言 うときには、「私にとって教育だった」とい う詩篇と同じような言葉は出てくるだろう。

「神の業がこの人に現れるため」

しかし、被害に遭わなかった者が苦しむ 方々へ「苦難とは教育」などということは 決して言ってはならないことだ。さて、イ エス・キリストはこの弟子たちの問いかけ を断固として拒まれたのであった。本人が 罪を犯したからでも、両親が罪を犯したか らでもない、「神の業がこの人に現れるため なのだ」。私たちは、私をお遣わしになった 方の業をまだ日のある内に行わねばならない。誰も働くことができない夜が来る。気付き、覚醒、怠ってはならない、ということだ。ところが大変興味深いことに、もうしばらくこの句を読んでいくと、「こう言ってイエスは地面に唾で土をこねてその人の目にお塗りになった」と書かれている。

「シロアムの池」

まさに、手当をされた後、「シロアムの池 に行って洗いなさい」という教えがある。 シロアムの池、お気づきであろうか。ルカ による福音書13章に出てくる。そこは恐 ろしい地震の起こった場所だった。13章 4節、「また、シロアムの塔が倒れて死んだ あの18人は、エルサレムに住んでいたほ かのどの人々よりも、罪深い者だったと思 うのか。決してそうではない。言っておく があなたがたも悔い改めなければ、皆同じ ように滅びる」。シロアムの塔が倒壊した原 因ははっきり分かっていない。しかし、推 定ではやはり大地震によって崩れたのでは ないかといわれている。そこにたまたまお られた18人がれき死したとみられる。イ エス様は「そこへ行って目を洗っていらっ しゃい」とおっしゃるのである。苦難の死、 人々の嘆き悲しむ死、人間の命というもの がいかに脆弱で乏しく、神様から離れて存 在があるか。罪深いもともとの存在、個別 の罪ではない。誰しもが本来共有するとこ ろの神様から距離がある生き方、罪の中に あって生きる人間の弱さというものをとこ とんまで知るその場所に行って目が開かれ るようにと、イエス様は教えられるのだ。 しかし、私たちはそのシロアムの塔に行っ てそれだけで目が開かれるのかどうかとい うことも考えなくてはならないだろう。

「パウロにとっての涙の書簡」

今日はもう1カ所、コリントの信徒への 手紙第二、8章1節以下は、パウロにとっ ての涙の書簡といわれている。パウロはテ サロニケから祈りを持って送り出され、多 くの地方で伝道をしてきた。ガラテヤ教会 はパウロの伝道がある程度成功した所であ るが、パウロの伝道は、このガラテヤ教会 の人々にとっては、いわば見せ物、あるい はいたずらに自由というものを甘やかすも のと受け止められたようだ。

「古き規範、伝統的価値観に帰る」

古き規範、伝統的価値観に帰ることによ って、この自由というものの使い方をもて あます小アジア地方、ギリシャの地方の教 会は律法主義に戻っていくという仕方で何 とか落ち着こうとした。これがガラテヤ教 会の動きだった。一方、このコリント教会 は、大商業都市であった。ここではパウロ の教えが深く浸透してきた。しかしながら、 このコリントという大都市の教会はすさま じいほどの自由の腐敗が進んでしまったの であった。聖餐の乱れ、それからまた、人々 のいさかい、性的乱れ、秩序の乱れ、こう いった自由というものの使い方が腐敗、堕 落していく都市の問題がそっくり出ていた のがコリント教会の人々だった。ある意味 でガラテヤ教会の人々はコリント教会の倫 理的惨状を見て伝統価値規範に戻っていっ たということもできる。

「人間の自由の本当の使い方」

パウロは苦しんだ。ガラテヤ教会の人々

に、あなた方を自由にして下さったキリストの福音から離れてはならないと、怒りをもって叱責をすると同時に、コリント教会の人々には懸命に涙をもって自由の使い方、神様から与えられたイエス・キリストの十字架と復活による贖いによって与えられた人間の自由の本当の使い方を学んでほしいと、懸命に教えていった。それがコリントの信徒への第二の手紙に出ているのだ。

「人に惜しまず施す豊かさ」

このパウロに大きな喜びが与えられた。マケドニアの教会の人々だった。マケドニアの諸教会の人々は、苦しみによる激しい試練を受けていた。一つには迫害、もう一つには自然災害としての干ばつが激しかったといわれているが、生活が追い込まれていったにもかかわらず、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったのだというのだ。

「マケドニアの人々の自発的奉仕」

パウロはさらに証をしていく。聖なる者 たちを助けるための慈善の業と奉仕に参加 させてほしいと、しきりに私たちに願い出 たのだ。エルサレムの教会は大変な迫害の もとにあり、教会が立ちゆかなくなるほど の厳しさにあったときにパウロは比較的豊 かなコリント教会に援助を期待したのだが、 極度に貧しいギリシャの山奥の、マケドニ ア州の諸教会にはパウロは、慈善の援助を 頼まなかったにもかかわらず、コリント教 会が動かず、マケドニアの人々が自発的に 自主的に奉仕、援助を願い出たというもの だった。パウロは驚いた。マケドニアの人々 のこの援助の手は、神の御心に沿って私た ちにも、自分自身を捧げる献身、まさに献 身のできることとしてパウロは見出したの であった。

「自由とは自主的自発性にある」

自由というものは「こういう使い方をするものだ」、コリントの人々よ、分かってほしい。自由というものは強制の反対でも、自由放任でもない。自発的に愛の業を為していく自主性、自発性にあるのではないかということだ。愛と自由が結び付くとき、自由は決して腐敗しない。愛と自由がしっかりと結び合わされるとき、力ある神の御業が始まるのだ。

パウロはこのマケドニアの人々の奥に彼らが素朴に一生懸命仰いでいたイエス・キリストの貧しさがあったと見ていたのだ。主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。豊かな主は貧しくなり、十字架の死という貧しさの極限にまで上って行かれた。いわんや、私たちの生活が苦しいとしてもこの主イエス・キリストの貧しさに私たちも従っていこう。

「マケドニアの教会の心」

それがマケドニアの教会の心だった。パウロは大きな喜びのもとに主の貧しさによってあなた方はもう、豊かになる。コリントの人々よ、自由というものを人間のエゴのために使うものではない。自由というのは極度に貧しいマケドニアの教会員のように、自由と愛が結び付き、イエス・キリストの貧しさに連なっていくことの中に実は本当の豊かさを持つ。ここに豊かな人生、

豊かな心の大海原があるのだ。そう教えられるのだ。

「御心の天になるごとく」

最後に今日、東日本大震災の大きな試練の中にあるとき、無責任な人々が、「これは誰かの罪への罰だ」と、安全な場所にいる人は言うかもしれない。しかし、イエス・キリストは、そうではない。人間が故なき苦難を受けるのは「神の御業が始まるためである」。イエス・キリストご自身がゲッセマネの祈りにおいて「なぜ私がこの苦き杯を飲まなければならないのですか。どうしても分かりません。しかし、分からないが、飲まねばならないのならば御心の天になるごとく、地にも為させ給え」と、あの主の祈りと同じ心をもって受け入れていかれたときに、復活が始まる。神の御業が始まる。

「若い人々に変化」

人間の自発的献身という本当の自由の輝きがこの大地に現れ始めるのではないか。 私も今回の大震災の後で、若い人々に大きな変化が実は始まっていることを見出す。 若い人々は、今何かしなくてはならない、 そして本当に学ぶことができる多くの事柄があることに気づき始めている。大変な苦難のうちにあるが、神様の新しい業が始まっていることを私たちは見落としてはならないであろう。そして「神よ、私たちをもないであろう。そして「神よ、私たちをもないであろう。そして「神よ、私たちをもないであろう。そして「神よ、私たちをもないであろう。そして「神よ、私たちをもないであろう。そして「神よ、私たちをもないであろう。

日本基督教団埼玉地区講演会 2011年11月13日(日) 大宮教会

「福島第一原発事故、脱原発をどのように受け止めるか」

「ノアの箱船、バベルの塔、そして原発」

「東日本大震災は第2の敗戦体験」

「十字架と復活共有体験としての復興」

「人間は万物の支配者でなく、神からの委託管理人」



聖学院大学長 阿久戸 光晴 先生

この度の大震災は、過去千数百年の書か れている歴史を調べても未曾有の事態。な ぜ、1500年の間、未曾有の事態なのか。 記録によれば岩手県や宮城県には巨大な津 波があったと書かれているではないか。東 海地区にもある。下から巨大地震が起こっ て大地がぐらぐら揺らぐ。横から巨大な津 波が襲ってきて丘を目指して逃げていく私 たちの手を引きちぎっていく。人間は恐怖 におびえ絶望するときには上を見上げる。 光を求めて上を見上げるときに、そこには 日の光ではなく、何ものかによってまき散 らされる事態が下と横と上と三次元方向か ら人間存在を砕く出来事が起きている。こ のような事態は有史以来、少なくともなか った。特に上から降ってくるということは 日本の歴史上初めてであるといっていい。

「支配」から「治める」へ

さて、私の仕事の一つに、新共同訳聖書 をもう一回訳し直すという大きな作業があ る。大変な仕事で6年以上はかかる。先日、 私はある問題提起をした。新共同訳の創世

記の1章26節にこのような翻訳がある。 「神は言われた。『我々にかたどり、我々に 似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の 鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを 支配させよう』」。さらに28節「神は彼ら を祝福して言われた。『産めよ。増えよ。地 に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、 地の上を這う生き物をすべて支配せよ。』」。 口語訳聖書ではここは「治めさせよう」と なっている。「治める」、「ガバナンス」。こ の「支配せよ」という言葉は、英語聖書の 強い影響の下に訳したといえなくもない。

「お世話をする」、「面倒をみていく」

またカトリックの方が強く主張された。 英語の聖書では "Take domini on over "という。万物の上の「D ominion」(領土、領地)をやらせな さい。Dominusは主人、君主だ。こ の訳は良いのかどうか。文字通り、キリス ト教国ではない日本だとしても聖書の人間 の生死に対する影響力はものすごいものが ある。「ああ、万物を支配しないといけない んだな」となる。しかし、ヘブライ語の「ラ ーダー」という言葉がある。英語表記だと 「RADAH」となる。「ラーダー」という 言葉には「支配する」といった意味は本来 ない。確かに列王記、その他で「支配」と いう言葉に使われているケースが多いこと は事実だ。エレミヤ書、エゼキエル書、そ の他には「ラーダー」という言葉は、「お世 話をする」、「面倒をみていく」、「ケアをし ていく」、介護福祉のように「大切に介護し ていく」というニュアンスが強い。私は「支 配せよ」は、「治めさせよ」に戻そうと主張 した。含みの多い、「治める」という言葉は 味のある言葉だ。本当を言えば、「地を這う すべてのものの世話をさせよう」という風 に訳しませんかと申し上げた。「先生、気持 ちは分かるが、やはりラーダーには暴君が 支配をするかのようなニュアンスがある」 と、ある教派の方が言った。

「その考えが現在の環境破壊の背景」

それに対して私は「大変失礼ながら、その考えが現在の環境破壊を、いろいろな問題を生んでいると言えないでしょうか」と反論した。このラーダーの意味は、決してそういう意味でなく、逆に私はむしろローマの信徒への手紙8章の「万物を治めたに近いと申し上げた。22節「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦し知っていることを、わたしたちは知っています」。さかのぼって19節「被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます」。「万物を支配させよう」と言われている。ような、神の子たちの出現を待ち望んでいる。

るのではないか。万物同士のいさかいがある。調整が必要なあまりにも多くのことがあるかもしれない。でもそれは、暴君が、強大な皇帝や君主が支配をさせるのを待っているというニュアンスではない。白馬ではなく、ロバの子に乗った小さな童の子孫たちが現れるのを被造物は実に切なる思いで待っているとするならば、ここは「支配させよう」ということではないと思う、と申し上げた。

そして、実は、その後の創世記にはそのようなニュアンスを支持してくれるエピソードが豊かに出てくる。

「聖書から学ぶ自然観」

まず、ノアの洪水の出来事、ここに着目 すべきは創世記6章14節だ。ちなみに申 し上げておくが、「ノアの洪水は二度と起こ さない」と神様はおっしゃっている。大き な洪水はあるとしても万物の生命がすべて 絶滅するようなことは絶対に起こさない。 なぜなら聖書で約束されていることを私た ちも忠実に愚直なまでに信じていくべきだ と思っている。この洪水のことを考えると、 自然は決して人間を抱擁しない。人間に牙 をむくときがある。この厳しい自然観とい うものを私たちは聖書から学ばなければな らない。自然を愛するとしても美化するこ とはよくない。

「木の箱船を造りなさい」

人間に牙をむく自然の中で神様はどのようにしてノアたちを守ろうとされたか。6章14節「あなたはゴフェルの木の箱船を造りなさい。箱船には小部屋を幾つも造り、内側にも外側にもタールを塗りなさい」と

ある。口語訳聖書では、タールというのは アスファルトと訳されていた。人間の加工 技術によって箱船を完成させなさい。自然 の材質を用いながらも人間の知恵・知識産 業がそこに加わり、小さくはウイルス、大 きくは巨大な自然災害を守りなさい、とい うわけだ。

「神の祝福による知恵で生き残る」

ここには人間の加工技術、知恵への祝福 があるといって良い。ノアたちは神様から 祝福された知恵によって生き残ることが出 来た。

ノアたちは箱船から降りた後、何をした か。礼拝を捧げた。8章20節に出てくる。 まず、贖罪、そして神様を讃美する礼拝を 捧げた。生き延びることの出来たノアたち から再び子孫が増え始めてくる。ところが その子孫たちはとんでもないことをやり始 めた。それが11章の「バベルの塔」であ った。世界中は同じ言葉を使い、同じ言葉 を話していた。ところが彼らは煉瓦を作り それを良く焼こうと話し合った。石の代わ りに煉瓦を、漆喰の代わりにアスファルト を用いた。あのタールを塗るという加工技 術からはるかに技術文明が進んだとみられ る。ところが箱船の延長上にあると思われ る物で、何を造ったか。天にも届くという ばかりの高い塔を造った。

「バベルの塔の恐ろしい姿」

さあ、天まで届く塔のある街を建て、有名になろう。そして全地に散らされることのないようにしよう、と言ったのだ。社会工学を使った人類共同体を組織し、ウイルス、自然災害を次々と征服し、エネルギー

問題においても強大な、膨大なエネルギー源となる加工技術を用いて、「地球において有名になろう」、「人類よ、永遠なれ」。これがバベルの塔の恐ろしい姿であった。ところが、そのことによって意思疎通が出来る一つの言葉が通じなくなっていく。人間というのは社会分業的生き物なのでお互いが思っていることが分からない。コミュニケーションが取れないということがおそらく原因で、このバベルの塔の建設は中止になった。

「バベルの塔からの癒しの回復」

ちなみにペンテコステは、バラバラになった言葉が、いろいろな言葉であっても語るメッセージは一つ、心が一つというバベルの塔からの癒しの回復であると見ることが出来る。今回、日本を例にとっても、ありとあらゆる科学技術が進んでくる。おそらくは明治の頃に平均寿命が50歳を割っていたと思われるのが世界に冠たる大長寿国になった。日本人が苦しめられてきた。温暖多雨の地域だから寄生虫が退治され、予防注射が普及してきた。まさにノアの箱舟的な加工技術の祝福の下に私たち日本人は長寿国を目指して進んでいった。滅びることを免れたのだ。

「バベルの塔を造ってきた私たち」

ところがバベルの塔のようなものを私たち、造ってこなかったか。このことを今回の大震災をきっかけにで考えなくてはならないと思う。

「私立大連盟学長会議での体験」

私たちは大震災の正体がいったい何かと

いうことを聖書の観点からしっかり押さえなくてはならない。私は忘れる事のできない大震災の2カ月前の出来事、私立大学連盟の学長会議での体験を紹介したい。

今年1月、当時の文部科学省の副大臣の 一人が「日本を強くしましょう。日本は侍 の国です。そして強者の国を目指していこ うではないか。産業をしっかりしてくださ い。世界に冠たる日本の加工技術を広めて いこうじゃないか。しかし、日本が今誇る ものは何か。スポーツくらいだ。プロ野球 は世界一に2回成った。あれはイチロー選 手の大活躍でなった。私立大学の学長の皆 さん、気合入れて若者を教育してイチロー をたくさんつくってください。そしたら1 0年もしないうちに日本が世界一になる種 目は増えるでしょう」と、こうおっしゃっ た。「しかし、恥がありますよ。皆さん。学 習障害児童が東アジアで断トツの4・7%。 学習障害、LDを撲滅しましょう。中国を 見なさい。0・011%以下ですよ」と、 おっしゃった。

「さあ、学長たち、どうしますか」

経済同友会の副代表幹事の方が出てきた。 とても素朴な方とお見受けし好感持ったが、 お話はよろしくなかった。「22歳の若者、 まったく使い物にならない。ろくな基礎知 識もないくせに、読書もしてない。少し叱 るとふてくされてメールを始める。携帯メ ールで恋人とやるならまだいいが、母親と メールのやりとりをしている。何ですか、 これは」というわけだ。「こんな日本の若者 を産業界は使わなくなりますよ。留学生に 皆代えてしまいますよ。さあ、学長たち、 どうしますか」こういう話だった。私は、 「おっしゃる事、ぜんぜん違うと思います」 と言った。「副大臣さん、私の記憶ではイチ ロー選手は第2回WBCでぜんぜん打てま せんでしたよ。最後の決勝戦の韓国との延 長 10 回でイチロー選手が劇的ヒットを打 って日本は優勝したが、それまでぜんぜん 打てませんでしたよ。第一線の試合に出ら れない控えの選手が一生懸命、彼と同じス トッキングスタイルで支えた。しかし、私 がどうしても聞き捨てならないのはLDを なくすというのは、いただけないと私は思 います。LDというのは現在においては優 秀な方でもありうるのです。私もLDかも しれない。だけれども日本の4・7%とい うのは正直度の表れかもしれず、これが恥 ずかしいという受け止め方はいかがでしょ うか」と、申し上げた。

「完成品を促成栽培でお求めか」

それから副代表幹事の方に申し上げたの は、「使い物というおっしゃり方は私にはシ ョックだった。これは若者に大変失礼では ないか」と、申した。「人生 50 年」だった のが今、70年になり、現在では平均90歳 にまで近づいている。「副代表幹事、現在日 本は大器晩成社会になっているのではない でしょうか。完成品を促成栽培でお求めに なりましょうか」と申し上げた。帰り道、 暗澹たる思いで帰ってきた。こういう道を 日本は千数百年やってきた。「侍の国」とい うのは結構な話だが、強い国を目指す日本 の歴史を通じて日本国家の「地の基」をそ こに置いているのだと思った。ところが、 その2ヵ月後にその「地の基」が大きく揺 す振られたのだ。

「3つの次元から崩壊」

あの東日本大震災は冒頭に申し上げた 15 千年以上の日本の有史以来、類例のない大きな災害だということは、3 つの次元から崩壊していることからも分かる。第1は、下から地震がある。これは私たちのものの考え方が根底から打撃を受けていること。下からの地震、「地の基」という考える存在基盤が崩壊し始めているということに関連して第1の問いがあった。「あれは現在の腐敗した若者文化への神罰だ」というある自治体の首長の言葉があるが、それと同時に「すべてを元通りにやろう」という声があった。プロ野球も予定通りにやるとあるオーナーの方は言っていた。

「絆の断絶という象徴的な出来事」

2番目に、横からの大津波がどれほど小さな子供たち、あるいはチャレンジを抱えながら生きておられる方々の衝撃であったかということ。被災地で津波が来るときに手を取っていこうとする手が引きちぎられたという人に私はお会いしたが、生き残ってしまった罪責感をお持ちの方が多い。この絆の断絶という象徴的な出来事があった。西日本の私も尊敬するカント哲学の研究者である国立大の総長の方が、「被災地の東日本の人々と無傷な西日本の私たちとの間には、隔たりがある。隔たりを自覚しよう。西日本が出来ることに限界があるのだから。そして阪神・淡路大震災も西日本で自力で克服できたのだから」とこうなる。

「十字架と復活の業」

私はイエス・キリストという方は隔たり の強調などはなさらなかった。逆にこうい う大きな悲しみの出来事として絆をおつくりになるために、架け橋となるために神と人との、人と人との間の絆をおつくりになったのが十字架と復活の業ではなかったか、と思うのである。

そして3番目に、上から放射能。冒頭申し上げた日本の希望、再建の希望を見い出せないようにしている象徴が放射能禍と言ってよい。「上とは何か?」神や、尊敬すべきもの、私たちが献身すべき対象や次元、そこが「上」であるとすれば。そこにこういう問いが出てくる。

アエラの4月10日号に「この度、神は 人を殺した。でも神はもともと張りぼてだった。もう神など信じるのを止めて日本人 よ、自分たちの二本の足で、自分たちの力 で生きよう」という呼び掛けがなされた。

「私たちの生き様において答える」

私たちは神も仏もないという、このカメラマンの方がさらっと書かれたこの問いを真摯に受け止めて、私たちの言葉ではなく、言葉の口先ではなくて、私たちの生き様において答えないといけない、と思っている。

「先生、神様は本当にいるの」

事実、この直後に先ほどの自治体の方と は違う別の方が「先生、神様は本当にいる のでしょうか」と聞いてきた。、私はこれに 答えたが、大震災がなぜ起こったかを問う 時、聖書に聞くと、同じような事態がたく さん書かれていて、問われているのは私た ちなのかもしれないということが次第に見 えてきた。大震災を通して私たちが逆に問 われているのではないか。

「日本にとっての第2の敗戦」

まず、下からの地震に対応する第1の問 いについて。私は東日本大震災の後の激励 的な講演を幾つか頼まれて昔の資料を探し ていたとき、2枚の写真が目に留まった。 その1枚は1945年8月6日、広島の原 爆被災地のものだった。もう1枚は194 5年8月10日、東京大空襲後の大変悲惨 な首都圏の荒れ果てた状況の写真だった。 その時、私は直感した。これは日本にとっ ての「第2の敗戦」ではなかったか。第2 の敗戦といって悪ければ、戦争を起こした わけではないのだから、大震災を「第2の 挫折」として、受け止める必要があるので はないか。しかし、何が挫折したのか。そ れがまさにあの文部科学省の副大臣や、あ るいは経済同友会の上層部の一部で行われ ているらしい、強い者を中心とした強き国、 弱い者は脇役でいい。こういう「地の基」 というものが、崩壊、挫折したのではない か、と思っている。

「大事な大事な挫折体験として」

であるから、3月11日などなかったかのごとくではなく、3月11日は痛ましいけれども起こってしまった大事な大事な挫折体験として受け止めなければならないと私は思っている。

ちなみに2001年9月11日など、なかったかのごとく原型修復を図ろうとしたのがブッシュ米前大統領だった。アメリカの教会員たちが反対をして原型修復ではなく、祈りの記念碑をつくり、現在存在する。再び一部で塔を元通りに建てるという議論が再燃しているようだが、原型修復はしないところに意味があるという、アメリカの

教会員たちの見解は尊重される必要がある。

同じく1945年8月15日など、あたかもなかったかのごとくに元通りに修復しようとしてきた動きとキリスト教会は真剣な対決、議論をしてきたのではなかったか。実は主イエスの十字架の死など、あたかもなかったかのごとく考えた異端が当時あった。一時的気絶だった。3日後再びイエス様は動き回り始めたというのは異端だ。これは全部パラレルに共通する誤りの考えだ。土台が崩れたならば再建する必要がある。でもそれは新しい家造りらが捨てた隅の頭石を基とした再建をするべき時ではないか。

「神様の御業が始まる門」

苦難は罰ではなく、苦難というのは痛ましいが、新しい神様の御業が始まる門である。入口である。苦難はただあきらめるのではない。反逆を生むのでもない。因果応報でもない。他者が考える頭で考えた教育でもない。神の新しい御業が現れるためにあのシロアムの池で「目を洗っていらっしゃい」ということだった。

イエス・キリストの十字架の場面で、イエス様は虐待を受けて十字架が担えなくなったところに、クレネ人シモンがこ代わりに十字架を担う。たまたま都詣でに来ていたユダヤ系のクレネ人シモンが無理に負わされるこの体験は、日本社会に似てないだろうか。クレネ人シモンにはマルコによる福音書によるとアレキサンデルとルポスの父、クレネ人シモンという人がいた(マルコによる福音書15章21節)。ローマの信徒への手紙にルポスという人物が出てくるが、少なくともマルコがこう書いた背景にはマルコの教会アレキサンドロとルポスの

お父さんが、そうだ、たまたま無理に十字 架の共有体験をさせられた、そのことであ のお父さんが回心をし、やがて子どもたち がおそらくお母さんも一緒に原始教会を支 える重要な役割をした。私はこの第1の問 いに答えるとすれば、日本社会は主イエス と共に十字架体験共有に入ってきていると いうように受け止めることができる。

「絆をもたらす十字架の出来事」

第2、主イエスの十字架は隔たりではなく、絆をもたらすということだ。十字架の出来事の時に異邦人とユダヤ人を隔てる神殿の垂れ幕が裂かれて隔ての垂れ幕がなくなった。隔たりではない。つながりなのだ。母マリアと愛弟子との間に血縁を超える共同体が生まれた出来事もあった。再建の原型としての教会、その再建の先駆けとしての教会、これがキリスト教会の本質であることだ。

そして第3の問い一。いよいよ核心に入ってくる。今年の受難節の3日目が3月1 1日だったということ。なぜ、このような悲惨な出来事が起こるか。なぜ、神の子が悲惨な十字架に最も残酷な十字架に付けられぬばならなかったか。これはつながっているということだ。神の子は地震の最中に逃げまどい、大津波の中で苦しみもだえ瓦礫の中に水を求めて渇かれ、しかも十字架の苦難の杯から逃れずに「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」(我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのですか)と叫ばれ、受難、受苦を全うされたということだ。

「渇くことのない命の水」

しかし、新しい永遠の命に蘇り、渇くこ

とのない命の水を賜り、そしてエペソ書に 出てくる空中に勢力を持つものと戦い、上 を見上げて放射能の上空に神様の力強いお 姿が現れるように最頂天に昇って行かれた ということではなかったか。その時に空中 に勢力を持つ者は陽炎のように消えていく。 ここに神がおられる。

「キリストという罪の頭石が土台に」

崩された木の基にこれまでの強い国、強 い国民の国、日本に代わるイエス・キリス トという罪の頭石が土台にあり、人と人と のつながりが断ち切られるような大津波に も逆らって、抗って神様と私たちを結び付 ける絆をもたらすためにイエス・キリスト が十字架と復活の業に入られた。そして上 空に天へと昇って私たちがどれほどこの空 中の主君に脅かしを受けたとしても揺るぐ ことのない信念、確信、信仰、信頼を持つ ことの出来る根拠として天へと昇られてい るということだ。そしてこの方と共に復活 体験としての復興事業を私たちは進めて行 くことになるのだ。それは物的なものだけ ではない。物的なもの以上に精神の復興、 本当の新しい精神の建て直しが必要である ことだ。

「原発事故とは何か」

原発事故とは何か。もう少し考えてみたい。中世のヨーロッパでは「空中の主」という悪鬼がしばしば絵に描かれている。ペスト菌をまき散らすサタンが袋からウイルスを播いているのがあった。それからサタンが太陽の光を遮って干ばつを起こすような「空中の主」として絵に描かれている。まさに日本の社会にとってこの中世ヨーロ

ッパのサタンの働きのように見えるのが、あの放射能である。

「東京電力への深甚なる問い掛け」

私たちはなぜこのようなことになったのかについて東京電力をはじめとする組織に対して深甚なる問い掛けをしなければならない。日本を豊かで経済的に強力にしようとするためには資源のない日本において原子力が必要であるということが昭和30年の前半のあたりから既にあった。国庫助成金付きの事業ということと、マスコミ統制をしながら情報公開もコントロールしながら原子力発電は恐ろしいものではないという、そういう仕方で国家事業として進められてきたのが原発であったといえるわけだ。

「経済大国の象徴としての原発」

しかし、私たちはこの原発によって確か に日本は強く豊かな経済大国が築かれたと いうことを公平に考えなくてはならないこ とだろう。しかし、今日のこの事態を考え るときに、あのドイツにおいても30年後 に原発は全廃する、とメルケル首相は言っ ている。キリスト教民主同盟だけでなく、 社会民主党はもっとスピードアップしよう と言っている。日本もそういう方向に徐々 にやはり進まざるを得ないだろうと思う。 もう一つ付け加えておきたいが、原発自体 が私たちにとっての大きな問題だとは突き 詰めて考えることはないと思う。そうでは なくて、なぜ原発のようなものを国家事業 として国民が皆で成功させてきたのか。そ こには経済的に恵まれた豊かな国を築こう というエコノミックアニマルとは言わない が、経済大国を目指していこうとする、そ

して豊かな社会を築こうとする国民的な下からの強大な力が押し上げていったということを素直に認めなければならないのではないか。

脱原発を推進しようとすればこの問題を 我々は真剣に考えねばならない。経済性一 本に考えることにあるブレーキを駆けてい く。今回、私たちの大学も冷房をつけずに 節電に耐えた。しかしながら達成できた。

「無駄なエネルギー消費の自覚」

その時、普段私たちは驚くほど無駄なエ ネルギーを消費していたことを私も感じた。 震災に苦しむ以前に、エネルギーをかなり 膨大に無駄にしていて、その分、何か資源 を他の国から略奪的していたのではなかっ たか、ということを考えるいい機会になっ たということだ。それに絡めると、ヨブ記 40章25節と黙示録の13章1節に、聖 書は大変面白い神話的な恐竜を描いている。 陸のベヘモット、英語で言えばビヒモス、 それから海のレビヤタン、英語読みすると、 リバイヤサン、陸上の強大な暴君政治のよ うな象徴のベヘモットと海上を支配してい く人間を取り囲んで脅かしてくる恐ろしい 海の恐竜リバイヤサンという不思議な存在 が、ヨブ記では神様がこういうベヘモット とレビヤタンを「ギリギリの所で押さえて いるのが分からないかヨブ」という呼び掛 けがあると同時に、ヨハネの黙示録にこれ がもう1回現れてくる。この世の中を荒廃 させる存在として。私は放射能禍という問 題を生むに至った私たちの豊かな国をつく る思いは「空のリバイヤサンかな」と思っ たりする。

「私たちが原発を育成してきた」

私たちがこの原発を育成してきたのだということ。だから原発を育ててきたのは他ならぬ日本国民だということを考え、その根源にあるのは豊かな国を目指すというところと深い関係がある。このことを考えながら対応していかないと、本当の解決にはならない。

「ラインホルド・ニーバーの祈り」

ところで、私たちはまず、この事態をど う受け止めるかということ。ラインホル ド・ニーバーの祈り「Oh God,

give us serenity to accept what cannot be changed, courage to change what shou ld be changed and w isdom to distinguis h the one from the other. Amen. | (神よ、変えるこ とが出来ないことを受け入れていく心の平 静さをまず与えたまえ。それにもかかわら ず、どこかに突破口があるであろう変える べきものを断固変えていく勇気を与えたま え。そして前者と後者を見分ける知恵を与 えたまえ)ということをニーバーの祈りの 紹介者の大木 英夫先生は逆にして、「変え ることの出来るものをまず変える勇気を。 そして変えることの出来ないものを受け入 れる平静さを。そして識別の知恵を」とい う順番に訳した。私たちは苦難に出合った ときのあきらめ、これが今回の日本人の強 靱な東北の方々の忍耐力という美徳も生ん でいるかもしれないが、「打つ手なし」とい うことにすぐ行ってしまうところが強いの ではないか。

「必ず突破口がある」

しかし、ラインホルド・ニーバーはそうではなかった。「必ず突破口があるという希望の人だった。それ故に、ニーバーの心を知る私(大木 英夫)は『変えるべきものを変える勇気を』と、訳させてもらったのですよ」とおっしゃっていた。私はこれを継承したいと思った。。

「生活形態を含めて変える」

しかしながら、このラインホルド・ニーバーの祈りをしっかり受け止めるとすれば、まず私たちの心、生活形態を含めて変えることが迫られているのではないか。無駄を省くこと。私たち人間が万物の支配者ではないということ。支配者ではなくて管理を任された忠実な管理人である。

「委託管理人であるという原点」

委託管理人であるという原点。不正な管理人になってはいけない。その上で原発の問題を考えるときに軽挙妄動、乱暴な議論でなく、現実適応可能な忍耐と英知を進めていくやり方でないと絶対成功しない。ここにも尊敬する保育の専門家の方がおられるが、小さい子たちに小さいときから大量消費ではなくて、人々が捨てていくものの中に実は知恵をもって蘇らせ使うことの出来るものが豊かにあることを教えていく。ゴミということも確かに不衛生になってはいけないが、限られた資源をどのように使っていくかというところから初めて脱原発を考えていくことが精神的準備になると思う。

キリスト教会がさきがけであるこということは、この点から取り組み始めるということではないか。

「大量消費の反省、心の変革」

現在の大量消費の反省、現在の禁欲、心の変革ということだ。

私はもう一つ断り切れずにお仕事を引き受けているのは私が住んでいる東京都荒川区で少し大きな仕事をしている。公務員の行政という仕事の本質は住む人に幸せを与えるためではないだろうか。公務員の仕事で一番気をつけるべきはな「Itnotmyjob」(私の仕事ではありません)ということではなくて人々の痛みを共有していく一歩踏み込んだ仕事だ。

「一緒に苦しみを担いましょう」

「これは知りませんよ」ではなくて、「も っと教えて下さい。一緒に苦しみを担いま しょう」。苦しみの共有を積極的にしていく、 そういう公務員の仕事があったときに住民 は幸福度を増していくということだ。3月 20日ごろに新婚旅行で日本に来られる予 定だったブータンのワンチュク国王ご夫妻 は、なかなか立派な方だ。しかし、ブータ ンのGDP(国内総生産)は日本GDPの 500分の1である。失礼ながら最貧国と 言っていいだろう。ところが幸福を感ずる 国民が実に98%もいる。どうしてかとい うと、「いつも国のすべての方々が私を温か く見守って下さっている」、「私には苦しい ことがあるし、貧しいけれど私という存在 が見守られている」という幸福実感の高さ である。私は「これだ」と思った。

「同じ問題を、痛みを共有」

まさにキリスト教会は神様に見守られているということを告げ知らせるさきがけであるとするならば、この被災地の方々、経済の冷え込んだ日本のすべての人々に、私たちは同じ問題を共有し、痛みを共有していくということを通して幸福度が増していくということではないか。

「がらっと変わりましたよ。荒川区の公務員」。サービス向上が全国で1位になった。これも再建過程の一つだった。私たちは大人の話としてだが、深い知恵の下で徐々に産業構造の転換を図る必要があるだろう。これには専門家も必要だ。この日本の国を本当に新しい支え合い、協力し合う社会に変えていく、その在り方にふさわしい産業構造ではどういうものが考えられるか。資源略奪的な、言葉は悪いが資源収奪的なことで成り立つ事業から無駄を省き、有効活用していく。

「価値が創造される産業構造の転換」

使い物にならない若者どころか、使い物にならないと思われるものにこそ価値が創造されていくような、そういう産業構造への転換が、必要ではないか。電力、エネルギーを膨大に消費しない在り方は決して不可能ではない。

「3・11の意味を受け止める」

最後に私は、今回の東日本大震災を第2 の敗戦体験として受け止めたいと思っている。というのは森 有正先生がパリから「日本は2回ドイツのように敗戦しないと変わりませんよ」というメッセージがあった。 私は読んだとき非常な衝撃をもった。また 再軍備して何十年もかけて軍国的な強大な 軍事大国を目指して日本がもう1回どこか の国に負けて崩壊してからでないと日本は 本当に温かい、お互いがお互いを大事にし 合うような人権尊重的な国になれないとい うことかと思ったからだ。しかし、今回の 東日本大震災の行方不明の方を含めて2万 人弱の尊い犠牲、痛みを通して、この3・ 11の意味をしっかりと受け止めるならば 再び戦争をしなくても、あるいは巻き込ま れなくとも第2の敗戦体験として賢い対応 をしうるということだ。被災地の方々と私 たちの間には深いつながりがあるというこ との中で、ここ将来100年ぐらいかけて 共に生きていく心を持っていく腹をしっか りと決めて行くときに思わぬ展開があるか もしれない。復活、共有体験としての復興、 ただ復旧ではなくて、意味を考えた復活共 有体験としての復興を英知を集め、私たち も意見を述べさせていただく時があるとい うことではないか。このことは私が冒頭申 し上げたローマの信徒への手紙の8章19 節、「被造物は神の子たちの現れるのを切に 待ち望んでいます」ということにつながっ てくるのではないだろうか。

「善良な管理者に委託された責任」

神様は人間に「後は人間が好き放題にお やんなさい」と言って無責任に丸投げする ことで人間が万物を支配するようにお創り になったのではないはずである。神様が万 感の思いを込めて「万物すべてに人間相互 の間にも愛情を込めて『いのち』を尊び、 丁寧に大切にして任せたよ」という、この 委託が創世記1章26,28節の意味では ないだろうか。善良な管理者として私たち には委託された責任がある。これが天地創造の教えである。旧約聖書の冒頭の教えである、ということをしっかり受け止めようではないか。その上でこれからの長い長い新しい日本の展開、転換について経済面も含めて、ご一緒に考えながら英知をもって進めていこうではないか。私もこれからも被災地の方々に必要な援助をしながら言葉を発しながら献身していきたいと思っている次第である。一言祈ります。

講師プロフィール

阿久戸 光晴(あくど・みつはる)

1973年一橋大学社会学部卒業。75年同大法学部卒業。住友化学工業株式会社勤務を経て90年東京神学大学大学院博士課程前期終了。神学修士。米国ジョージア大学法学部大学院特別研究生、同エモリー大学神学部大学院MTSコース在籍。95年聖学院大学政治経済学部助教授、同大副学長、同大学長、11年4月学校法人聖学院理事長に就任。

日本聖書協会新翻訳事業検討委員、東京 YMCA評議員、東京都荒川区不正防止委 員会委員長、荒川区民総幸福度(GAH) 研究会座長、日本基督教団滝野川教会協力 牧師、同東京池袋教会名誉牧師。

専門分野はキリスト教社会倫理学、人権、 デモクラシーの神学、関連分野として、ロ ジャー・ウィリアムズの思想史的研究。教会 と国家の分離の神学的・法学的研究をテー マとする。

著書: 説教集「新しき生」(聖学院ゼネラルサービス)等。1951年生まれの60歳。荒川区在住。

東日本大震災について教団議長の声明 東日本大震災、戦後最大の日本の危機に向かって 被災地域の教会と共に一命に仕える一

「わたしたちの助けは、天地を造られた主の御名にある」(詩篇124編8節)

被災された方々とその関係者の方々に心からお見舞い申し上げます。

3月11日午後2時46分、巨大地震が東日本を襲いました。世界の観測史上4番目に大きいマグニチュード9.0を記録し甚大な被害をもたらしました。その地震のエネルギーは関東大震災の45倍、阪神・淡路大震災の1450倍とのことです。さらに地震による津波は太平洋側の奥羽、東北、関東500キロにわたって、沿岸地域の町や村を襲い、多くの尊い人命と家屋を呑み込みました。地震発生から10日たっても、その被害状況の全貌は把握しえない状況にあります。

3月22日現在で、8千名余の死亡が確認され、さらに1万2千名余りの安否不明者、そして、35万名に近い人々が過酷な避難生活を強いられています。道路も寸断され、通信手段が切断されて、孤立した地域があり、ガソリン、軽油、灯油等が極端に不足しています。援助物資が被災地域に届けられず、水や食糧が不足し、真冬の寒さに震えて、命を奪われようとしています。今なお医師不足、薬の不足などで、命が脅かされ続けています。まことに、想像を絶する惨状に心が痛み、主の助けを祈らされています。

さらに二次災害として、福島第一原子力発電所で1号機から4号機までが壊滅的打撃を受け周辺地域の被災された方々を初め多くの方々を一層の苦しみと不安に追い込んでいます。原子炉が爆発し、放射性物質が大気に放出されないように、世界の

人々が注視していますが、ことに福島第一原子力発電所の近辺にお住まいの 方々の安全を願っています。巨大地震と津波がもたらした危機、原子力発電所爆発 による放射性物質による汚染の危機、戦後最大の危機の中に命が脅かされていま す。

教団では、大震災救援対策委員会を設置し、ただちに被災地域の教会の問安と被害 状況を出来るだけつまびらかに知る為、教団議長、二人の幹事、社会委員の4名を 仙台に派遣(13日~16日)、宮城、岩手の被災地域の教会問安と被害状況の把握 に努めました。また、地震直後から教団事務局の幹事、職員と共に議長が泊まり込 んで情報の収集に懸命に努めました。

15日には岩手の一関教会にて奥羽教区議長、東北教区議長と共に、奥羽教区内、東北教区内の被災地域の教会の被災状況の確認と今後の対策を協議しました。

被災地域の教会の牧師たちは通信網の切断、極端なガソリン不足等で移動手段が限定されるなかで、信徒、付属施設の職員、園児等の安否の確認、被害状況の把握など、必死な活動を続けております。全教団の祈りによる支えが求められます。

東北教区では地震直後から東北教区センターで地震被災の情報の収集にあたっていましたが、15日東北教区議長のもとに支援センターを設置し、情報の収集と支援活動を開始致しました。

関東教区内にもかなりの被害があり、関東教区議長を中心に被災教会の問安と被害状況の確認を懸命に行ってきています。余震による被災を含めて、今回の巨大地震は、上記教区の他、東京教区、東海教区、神奈川教区等にも深刻な被害をもたらし、また北海教区においても犠牲者がでました。

教団は、去る3月22日の常任常議員会で日本基督教団救援対策本部(仮称)を立ち上げ被災教区の支援活動を支えると共に4月18日に臨時常議員会を開催して今後の取り組みを協議します。

教団への海外諸教会からの熱い祈りと支援の申し出がなされています。海外の諸教会の熱い祈りと支援に支えられて、被害甚大な地域を抱える教区の教会の命を支える活動を支援し、さらに、被災教会の支援、再建などの取り組みに全力を注いで行きたいと考えています。この時、被災地域の愛する家族を失い絶望の中にある方々、愛する者の安否を懸命に求めに求めておられる方々、津波によって家を失い、生活場を失って途方にくれておられる方々、原発の事故で不安の中にある方々に、避難所生活をされている方々の為に、主の慰めと助け求めて、全教団の教会の祈りを深めましょう。

2011年3月23日 日本基督教団総会議長 石橋 秀雄

東日本大震災に伴う関東教区内教会の被災状況

東日本大震災は岩手、宮城、福島の東北地方の太平洋沿岸地帯に未曾有の被害をもたらし、関東では東北に近い茨城、栃木、さらに千葉にも大きな爪痕を残した。教団HPや「信徒の友」誌などによると、埼玉地区内の教会・伝道所は、**日野原記念上尾栄光教会**(上尾市)が牧師館の入口に立てた石塀が倒壊したほか、東松山教会(東松山市)が同じく牧師館の天井の一部が破損、生活上の問題はなく、**行田教会**(行田市)は牧師館の屋根瓦が落下、スレート屋根に変更工事を施工したという程度で、地区内の牧師、信徒は全員無事の様子だ。

関東教区全体を見渡すと、**宇都宮教会**が礼拝堂の講壇部分の天井と礼拝堂に上がる階段の天井(いずれも漆喰)が落ち、建物全体の到る所にひびが入っている。老朽化が進み、耐震補強が必要なため、建て替える方向で話し合っているという。

水戸中央教会は、2 階建て牧師館と平屋建て旧保育室は危険な状態にあり、早急に解体 撤去を迫られ、会堂部分は老朽化もあり、会堂を含めた全面建て替えが必要という。牧師 家族は隣接のマンションに仮住まいを始めた。

水戸自由が丘教会は、屋根瓦にはがれやずれが出ているほか、ブロック塀は手で触れるだけでぐらぐら揺れ、撤去が必要。牧師館の内壁には亀裂が入り、天井は波打っている。

群馬県では伊勢崎教会(伊勢崎市)が、老朽化した会堂の壁に被害があり、会堂は使用 せず、別棟で礼拝を守っている。会堂は補強と大改修をすれば使用出来る可能性は高いと いう。歴史的建造物である安中教会(安中市)は会堂内壁の漆喰に亀裂多数。

教会ではないが、途上国の農村開発に携わる専門職員を養成するキリスト教系の**アジア学院**(栃木県西那須野町)は、人的被害はなかったものの、敷地内に一定方向に地割れ、陥没が多数見られる。建物は本館をはじめ、食堂とホールのあるコイノニアは使用不能。解体予定だという。

東日本大震災救援募金会計

教団の東日本大震災救援対策本部(本部長・石橋 秀雄総会議長)が全国の教団教会・ 伝道所に呼び掛けて(5年間で国内募金が10億円、海外 億円)実施している救援募 金の2011年12月31日現在高は次の通り。

国内 2億1272万8987円 海外 2億93万4950円

写真で見る被災教会の惨状(松下設計提供)

上段=アジア学院・コイノニアの基礎破損 同敷地内に出来た地割れ(右) (左・栃木県・西那須野町)





中段=落下した天井(伊勢崎教会・群馬県伊勢崎市



下段=宇都宮教会礼拝堂内部(左) 下段=外壁が破壊された水戸中央教会(右)





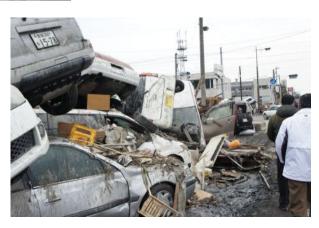


写真で見る東日本大震災の被災地

石橋 秀雄牧師が現地視察で撮影(祈りの旅) 岩手県上閉伊郡大槌町と釜石市で



大津波が襲った宮城県石巻市 車が折り重なるように無惨な姿をさらす



一東日本大震災関連参考資料集—

東日本大震災

2011年(平成23年)3月11日午後2時46分、宮城県・牡鹿半島の東南東沖約130キロの海底を震源とするマグニチュード9・0の「東北地方太平洋沖地震」が発生。震源域は岩手県沖から茨城県沖までの広範囲におよび、場所によっては10メートル以上の巨大な高波が押し寄せ、東北から関東地方にかけての太平洋沿岸地域に壊滅的な被害をもたらした。地震の揺れや液状化現象、地盤沈下、ダムの決壊などで各種のライフラインが寸断された。2012年2月8日現在で死者は1万5848人、行方不明者は3305人となっている。このほか、建築物の全壊・半壊合せて37万戸以上、ピーク時の避難者は40万人以上、停電世帯は800万戸以上に上り、被害額は16兆円から25兆円と試算されている。また、東京電力福島第一原子力発電所では、全電源を喪失して原子炉を冷却できなくなり、大量の放射性物質を放出する重大な原子力事故に発展した。

原子力発電所放射能漏れ事故

原子力発電とは、ウラン235の核分裂による熱を使って蒸気を発生させ、タービンを 回して発電を行うシステム。炉心部の核分裂は制御棒の出し入れとホウ素濃度の調整を通 じてコントロールされている。基本的には火力発電所における石油や石炭の燃焼エネルギ ーを核分裂で置き換えたもの。決定的な違いは、炉心付近は強い放射能を帯びる。ウラン の核分裂によって炉心部に蓄積される放射性物質(死の灰)はきわめて毒性が高く、これ を環境から完全に遮断させる必要がある。原発における最悪な事故とは、炉心部にある放 射性の核分裂生成物が周辺に飛散することで、炉心部から一次冷却水が失われたときに起 きる。人為的ミスや巨大な地震・津波などがその阻害要因として想定される。炉心では非 常に大量の崩壊熱を出しているため、冷却機能が失われると、ジルカロイから発生した水 素による水素爆発が起きる。冷却水の水位が低下して燃料棒が空気中に現れるようになる と、自身が発生する熱によって燃料棒のジルコニウム製の被覆が溶けてしまい、最悪の場 合は崩れ落ちた燃料棒が容器の底を突き破って環境中に放出されることがある。これがい わゆる炉心溶融(メルトダウン)である。このとき、残っていた冷却水と高温の核燃料が 接触すると、大量の水が一瞬のうちに蒸発する水蒸気爆発が起き、原発周辺に多量の放射 性物質がばらまかれる可能性が高い。ひとたびこのような事故が発生すると、数千人から 数十万人が致死性のガスによって死亡すると予想されている。

実際に事故が炉心溶融までに至ったのが東京電力福島第一原発である。同様の事故は既に1979年の米国のスリーマイル島原発事故と1986年のソ連(現ウクライナ)のチェルノブイリ原発事故が挙げられる。

東京電力福島第一原発事故

2011年3月11日、東日本大震災による巨大地震と津波で東電福島第一原発で、圧力容器内の水位が低下し、炉心が高温になるも、非常用の電源の故障で緊急炉心冷却システムも作動せず、水蒸気爆発が起き、日本初となる原子力緊急事態宣言が発令され、周辺半径20キロ圏の住民には避難指示が出された。

経済産業省原子力安全・保安院は、当初、国際原子力事故評価尺度(INES)の暫定値で「局所的な影響に伴う事故」とする「レベル4」に当たると発表。これは東海村JC O核燃料加工施設臨界事故と同レベルで、その後、「レベル5」、事故1カ月後の4月12日には8段階のうち2番目に深刻なチェルノブイリ事故と同じ「レベル7」にまで次々と引き上げた。

チェルノブイリ原発事故

ソ連(現ウクライナ共和国)のチェルノブイリ原発 4 号機が爆発・炎上し、多量の放射性物質が大気中に放出された「レベル7」の事実上、史上最悪の事故。無許可での発電実験中、安全装置を切り制御棒をほとんど引き抜いたために出力が急上昇して起こったとされている。放射性物質は気流に乗って世界規模で被爆をもたらした。直接の死亡者は作業員・救助隊員の数十人だけだったが、ガンなどの疾病を含めると、数万から数十万人に上るとされた。 2005年に発表された世界保健機関(WHO)などの複数組織による国際共同調査では、この事故による直接的な死者は最終的に9、000人との評価もある。 2000年4月26日に行われた14周年追悼式典では、事故処理に従事した作業員85万人のうち、5万5、000人が死亡したと発表されている。

スリーマイル島原発事故

米国ペンシルベニア州を流れるサスケハナ川の中州(周囲が3マイルなのでスリーマイル島と呼ばれる)に建設された2基あるうちの加圧水型軽水炉2号炉(電気出力96万[‡]。ワット)で、1979年3月28日、原子炉から1次冷却水が失われて水面上に露出した炉心が加熱した炉心溶融事故(レベル5)が起きた。原子炉の空焚きである。コンピューターが自動的に立ち上げた緊急炉心装置(ECCS)を、当直のオペレーターが手動で停止させてしまったため、深刻な事故に発展してしまった。放射性物質の外部への放出はほぼ防げたため、人的被害は軽微だった。一般緊急事態宣言が出され、10万人を超す周辺住民が避難した。不完全な設備保全、人間工学を重視していない制御板装置、そして中央制御室運転員の誤判断などが重なって発生した。この事故の影響で米国政府は新規原発の建設中止に追い込まれた。

地区壮年部の最近14年間の講演会等活動内容は次の通り。

1998年

2月22日 大宮教会 高齢者問題懇談会 「高齢化社会とキリスト者の役割」

講師:河 幹夫厚生省社会局施設人材課長(同盟基督教団和泉福音教会員)

5月17日 埼玉新生教会 総会 開会礼拝「共に歩む教会 担い合う宣教の業」三永 旨従所沢武蔵野教会牧師

9月23日 県民活動センター 一泊修養会 ~24日 (伊奈町)「人生の秋を豊かに」―聖書における老いの意味―

講師:最上 光宏浦和東教会牧師

信徒発題「信仰の継承」抜井 太一郎壮年部委員(志木教会員)

11月15日 大宮教会 信徒修養会「会堂建築を成功させるには」信徒発題:松下 充孝大宮教会員

「信仰継承の成果をあげるには」信徒発題:上松 寛茂上尾合同教会員

1999年

2月21日 大宮教会 講演会「いと小さき者の一人に」

講師: 天羽 道子かにた婦人の村施設長 (千葉県館山市大賀)

5月16日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「私も働く」中谷 清熊谷教会牧師

6月20日 大宮教会 講演会「伝道へ一礼拝からの出発」

講師:小島 誠志日本基督教団総会議長、松山番町教会牧師

2000年

5月28日 上尾合同教会 総会 開会礼拝 説教「福音の伝播 クレ・シモンに学ぶ」高橋悦子桶川教会牧師

5月28日 壮年部創部30周年記念誌発行 総会出席者及び各個教会に配布

出席 18教会、32人

10月29日 大宮教会 講演会「高齢社会と生きがい」 出席 23教会 69人

講師:山崎 美貴子明治学院大学副学長

2001年

2月25日 埼玉新生教会 総会 開会礼拝 説教「真の富」田中 かおる安行教会牧師 出席 13教会 39人 5月27日 大宮教会 講演会「ひとにぎりの土」

講師:小澤 貞雄秋津教会牧師(多摩全生園)

10月14日 各ブロック「魅力ある教会づくり」(信仰の継承と教会員の高齢化) 各壮年会員によるシンポジウム

2002年

2月24日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「失われるもの、実るもの」柳下 仁北川辺伝道所牧師 5月26日 大宮教会 講演会「自由において共に生きよう」

講師:関田 寛雄青山学院大学名誉教授(礼拝説教も)

2003年

2月23日 埼玉新生教会 総会 開会礼拝 説教「神の御賞賛を目指して」中村 忠昭埼玉新生教会牧師

9月14日 大宮教会 講演会「老いを生きる」講師:阿部 志郎横須賀基督教社会館長、神奈川県立保健福祉大学長

開会礼拝 「白髪になっても実を結ぶ」 山岡 創坂戸いずみ教会牧師

2004年

2月15日 大宮教会 総会 「主を待ち望む」鎌田 康子越谷教会副牧師

5月16日 大宮教会 講演会「聖霊の息吹を受けて」―信仰の継承を願ってー

開会礼拝 「枯れた骨の復活~預言者エゼキエルの体験~

講師:いずれも大宮 溥日本聖書協会理事長、成瀬が丘教会牧師、阿佐ケ谷教会名誉牧師

2005年

2月20日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「カナの婚礼」森 淑子狭山伝道所牧師

7月17日 大宮教会 「認知症の正しい理解―心のケアと信仰―」

講師:長谷川 和夫認知症介護研究・研修東京センタ―長

聖マリアンナ医科大学名誉教授、銀座教会員

開会礼拝「主の恵みを共に~認知症への主の眼差しを読みとろう~石川 栄一北本教会牧師

9月23日 大宮市民会館 1日修養会「共に学び、共に考えよう〜教会の成長〜」講師:疋田 國磨呂大宮教会牧師

2006年

2月19日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「私は福音を恥としない」最上 光宏浦和東教会牧師

7月30日 大宮教会 講演会 「老いをどう生きるか~希望を支える信仰と老後~」

講師:児島 康夫川越キングス・ガーデン施設長日本ホーリネス教団川越のぞみ教会員

開会礼拝 「聖霊による無償の賜物が一人一人に」 疋田 勝子大宮教会副牧師

2007年

2月18日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「福音と讃美」柳田 剛行台湾基督教会牧師 出席 15教会 28人 9月17日 大宮教会 1日修養会「共に生きる生活~教会の活性化~」講師: 疋田 國麿呂大宮教会牧師 11月25日埼玉新生教会 開会礼拝 「ただ一つのこと」 金田 佐久子西川口教会牧師

> 講演会「国籍は天に」〜特別養護老人ホーム・スマイルハウスのターミナルケアの試み〜 講師: 仲矢 杏子スマイルハウス施設長

2008年

2月17日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「壮年の使命」竹内紹一郎深谷西島教会牧師 出席 14教会 26人 6月29日 大宮教会 修養会 開会礼拝 説教「生き生きと共に生きる教会生活」 出席 13教会 60人

主題講演「御言葉の聴き方について・共に生きる教会生活~ボンヘッファーの真実な交わり~」

講師:いずれも疋田 國麿呂大宮教会牧師

11月16日 大宮教会 こうえん会 福音落語「めめんともり・石打ち」 出席 14教会 66人

出演: 古琴亭 志ん軽(本名・齋藤 和夫氏)代々木上原教会員

詩吟「西郷 南州・いつくしみ深き」

2009年 出演:豊川 耕颯(本名・豊川 昭夫氏)越谷教会員

2月15日 岩槻教会 総会 開会礼拝 「隅の親石」川中 真岩槻教会牧師 出席 13教会 31人

7月19日 大宮教会 修養会 開会礼拝 説教「すべての民を私の弟子にしなさい」 出席16教会 70人

主題「これでいいのか?今の教会」 ~データから 10 年先の姿を観る~

(資料 教団 50 年データ分析と提言 制作: 教団予算決算委員会 CD-ROM 映写)

講師 いずれも疋田 國磨呂大宮教会牧師 司会 荻田 久次郎兄(越谷教会)

11月29日(日) 大宮教会 講演会 開会礼拝 説教「現代に合った伝道パラダイムの転換」疋田 國磨呂大宮教会牧師 主題「四世代が喜び集う教会形成」~高座教会の取り組み~ 出席 12教会 71人 講師 カンバーランド長老キリスト教会 高座教会 松本雅弘牧師

2010年

2月28日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「御言葉が栄える」石橋 秀雄越谷教会牧師 出席 14教会 23人 7月18日 大宮教会 修養会 主題「神の国のビジョンに生きる教会」〜ゆりかごから天国まで〜

講師 日本同盟基督教団 西大寺キリスト教会 赤江 弘之牧師 出席14教会 54人 11月28日(日) 大宮教会 講演会 開会礼拝 説教「主に用いられる弟子たち」 疋田 國磨呂牧師 (大宮教会) 主題「誰でもホッとする群れに向かって」〜地域との結び付きを大切にする教会〜 講師 日本同盟基督教団 土浦めぐみ教会 清野 勝男子牧師 出席 14教会 60人

2011年

- 2月27日(日) 大宮教会 総会 開会礼拝 説教 「さあ、見に来て下さい」木ノ内一雄川越教会牧師 出席15教会 32人
- 6月26日(日) 埼玉新生教会 開会礼拝 説教「分かち合う喜び」土橋 誠飯能教会牧師 出席 15 教会 41 人 特別講演会 主題「戦後最大の危機の中で」〜教団・教会・私たちは〜 講師 日本基督教団 総会議長 石橋秀雄越谷教会牧師
- 11月13日(日) 大宮教会 開会礼拝 説教「主イエス・キリストの貧しさによって」 出席 11教会 37人 講演会 主題「福島第一原発事故・脱原発をどのように受け止めるか」 講師 阿久戸 光晴聖学院大学学長

定期総会・委員会の開催 2011年度(2011年2月1日~2012年1月31日)

定期総会 2月27日 大宮教会

委員会 2月27日 大宮教会、3月20日 休会、 5月15日 越谷教会、6月26日 大宮教会、7月24日 春日部教会、9月25日 西川口教会、11月13日 大宮教会、 2012年1月15日 上尾合同教会

2011年度委員会組織

委員長 松下 充孝(大宮) 書記 島崎 光雄(武蔵豊岡) 会計 田島 章義(春日部) 委員 阿部 孝司(上尾合同) 和泉 雄寿(和戸) 岩井田 慎二(埼玉和光) 荻田 久次郎(越谷) 柏田 實(西川口) 高橋 幸好(浦和東) 樋口道成(岩槻)

協力委員 上松寬茂(上尾合同) 地区委員 壮年部担当 三井田 忠昭(岩槻)

日本基督教団関東教区 埼玉地区壮年部機関誌 「埼玉・教会・壮年」 NO. 11号 2012年2月19日発行 発行人:松下 充孝 編集人:上松 寛茂